宇津内式土器の編年

――続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位 (1)――

熊木　俊朗

1．はじめに

宇津内(うつない)式土器は，北海道の網走地域を中心に分布する，続縄文時代前半期の土器型式である。

1933年に河野広道氏が「北海道式薄手縄紋土器群」として「前北(ぜんぽく)式」「後北(こうほく)式」を提唱して以来〔河野1933〕，網走地域の当該期の土器群に対しては「前北式」〔河野同上，1958〕「後北式北見型」〔河野1958〕の名称が用いられてきた。山内清男氏によって「続縄紋式」が提唱された〔馬場ほか1936，山内1967〕後，1960年代になってから「前北式」「後北式」について再検討が始まり，北海道各地で新たな続縄文土器型式が設定されていった。そのような中で，1977年，宇田川洋氏は，金盛典夫氏〔金盛1973〕が宇津内遺跡〔米村・金盛1973〕の報告で「Ⅱ群ａ類」・「Ⅱ群ｂ類」と分類した土器群に対して，それぞれ宇津内Ⅱａ式・宇津内Ⅱｂ式という土器型式を設定した〔宇田川1977〕。宇津内遺跡の良好なまとまりを示す資料によって，網走地域の当該期の土器型式の様相が具体的になったことで，宇津内式の型式名が定着し，現在に至っている(註1)。

この宇津内Ⅱａ式・Ⅱｂ式の間では型式学的連続性が強いのであるが，その後の一括出土資料の増加によって，各々のまとまりと両者の層位的関係はほぼ確認されつつあり，宇津内Ⅱａ式・Ⅱｂ式の２型式の実在性と編年は確定したといってよい。一方，宇田川氏は佐藤達夫氏の編年〔佐藤1964〕を基礎として，宇津内Ⅱａ１式・Ⅱａ２(古)式・Ⅱａ２(新)式・Ⅱａ３式，Ⅱｂ１式・Ⅱｂ２式の６つの細分型式を設定している〔宇田川1977, 1982, 1985〕。しかし，氏の細別案に対しては疑問を呈する意見もあり〔金盛1982〕，検討の余地を残している。

網走地域の土器編年上における宇津内式土器の位置であるが，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式との間には，１ないしは２型式を設定する見解が出されている〔宇田川1982，大沼1982ａ，1989，金盛1982，森田1996〕。また，宇津内Ⅱｂ式に後続する型式としては，後北C_1式を置く意見が一般的といえる〔大沼同上，金盛同上〕。

本稿の目的は，宇津内式土器の編年の検討と，宇津内式に先行する縄文晩期末～続縄文初頭の土器群・後続するとされる後北C_1式土器と，宇津内式の関係の解明である。特に，これまで言及されてこなかった文様の縦の割り付け原理と文様単位の問題を検討することによって，宇津内式土器の器形と個々の文様とを結びつけている規則の構造と，その変遷過程を明らかにする点が本稿の主

眼となる(註2)。

宇津内式土器の型式変遷を構造的・系統的に理解するためには，文様の縦の割り付け原理と単位の把握が不可欠であることが本稿での分析によって明らかにされるであろうが，本稿で提起した分析の視点は，宇津内式土器に対してのみ有効なのではない。本稿の最後に，予備的な考察ではあるが，後北式(註3)ならびに，北海道東部（道東）・北海道北部（道北）の続縄文土器群における，土器型式の構造について文様の割り付け原理と単位数の視点から検討し，続縄文土器群の編年に関する新たな分析の視点の提示と問題提起を行ってみたい。

2．網走地域における縄文晩期末～続縄文初頭の土器群

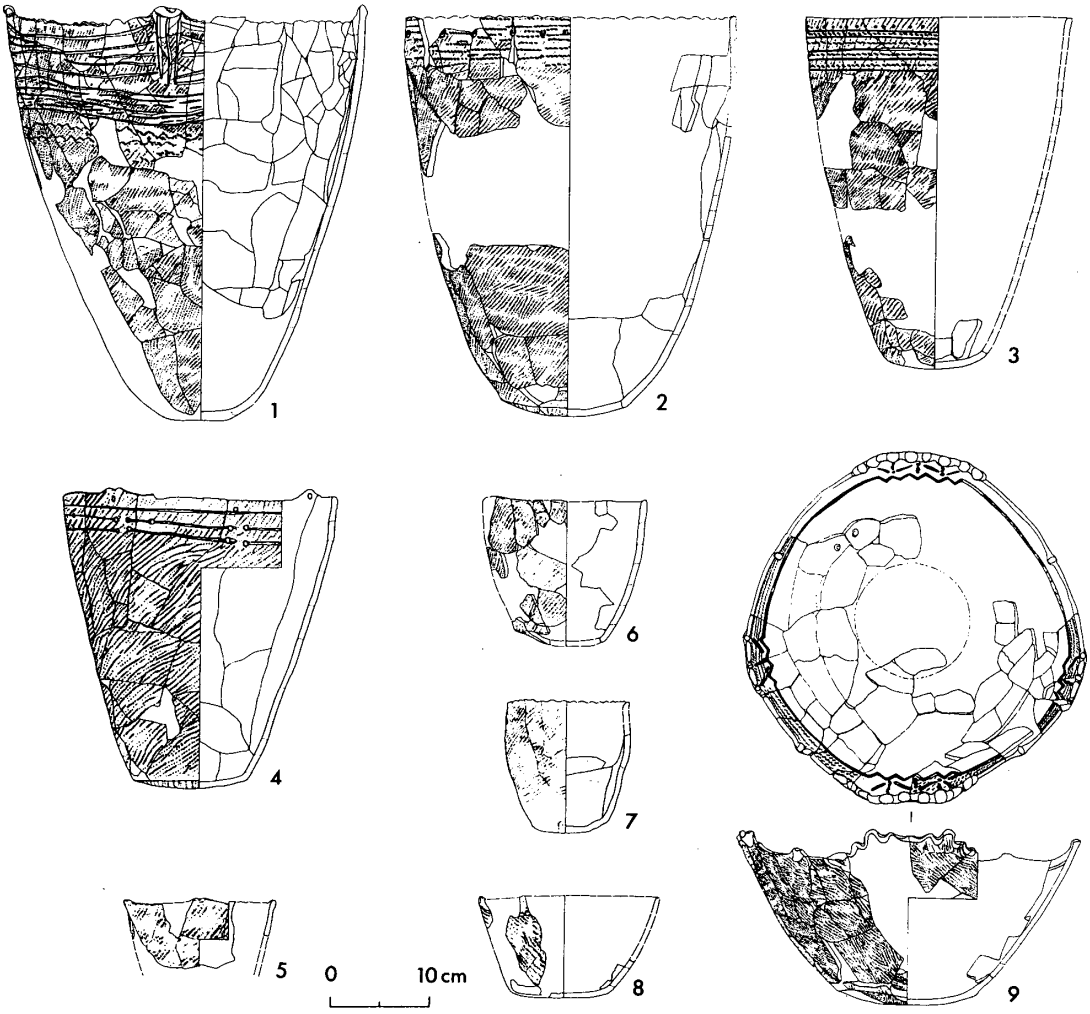
宇津内式土器について検討する前に，網走地域の縄文晩期後半の土器型式について概観しておきたい。道東の縄文晩期後半の土器編年は，幣舞(ぬさまい)式→緑ヶ岡式とされている〔澤1969，鷹野1981〕。網走地域において，幣舞式土器がまとまって出土した例としては栄浦第二遺跡〔東大編1972〕13号竪穴ホ号床面（以下，栄浦第二13ホ号と略）出土土器群（第1図）があり，この土器群は幣舞式でも後半段階に位置づけられている〔佐藤1972，鷹野1981，大貫1995〕。一方，網走地域の，縄文晩期末～続縄文初頭に位置づけられる土器群についてはこれまで出土例が少なく，佐藤達夫氏〔佐藤1964〕，宇田川洋氏〔宇田川1982〕，金盛典夫氏〔金盛1982〕らの検討にもかかわらず内容には不明な部分が多かったが，最近，栄浦第二・第一遺跡〔武田編1995〕である程度の量の出土が報告されている（第2図）。この土器群は，かつて工字文・変形工字文のモチーフを有する土器として佐藤氏・金盛氏らが言及した〔佐藤同上，金盛同上〕各遺跡の土器群と同種の土器を多く含んでいる。これら栄浦第二・第一遺跡の土器群のうち，栄浦第一遺跡である程度まとまった状況で出土した土器群については，大貫浩子氏〔大貫1995〕が幣舞式土器，釧路地域の緑ヶ岡式土器と対比しつつ編年を検討している。

以下に大貫氏の論考を参考にしつつ(註4)，栄浦第二・第一遺跡の土器群を中心に，網走地域の，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群について概観してみたい。

2.1 文様単位（口唇部突起数）の問題

栄浦第二13ホ号土器群の各個体について，口唇部突起の文様単位数をもとに分類し，集計したのが第1表である。0単位（平縁，ないしは「小鋸歯状」〔佐藤1972：377〕口唇）と4単位の個体が多数を占めるが，「小型舟形鉢」〔佐藤同上〕の2単位と，大型浅鉢に見られる，大型突起一対と，片側に寄った小型突起一対の特殊な単位を有する個体が一個体づつある。栄浦第二13ホ号以外の網走地域の幣舞式では，他に大型突起一対と小型突起一対の「2＋2単位」の例がある。

一方，栄浦第二・第一遺跡の土器群では，完形の個体がほとんどないため口唇部の突起数ははっきりしないが，平縁の例と突起を有する例がある。類例であるピラガ丘遺跡第Ⅱ地点〔米村ほか1972：52上〕や中ノ島遺跡〔久保1978：Fig. 87〕の資料からすると，2単位，4単位，2＋2単

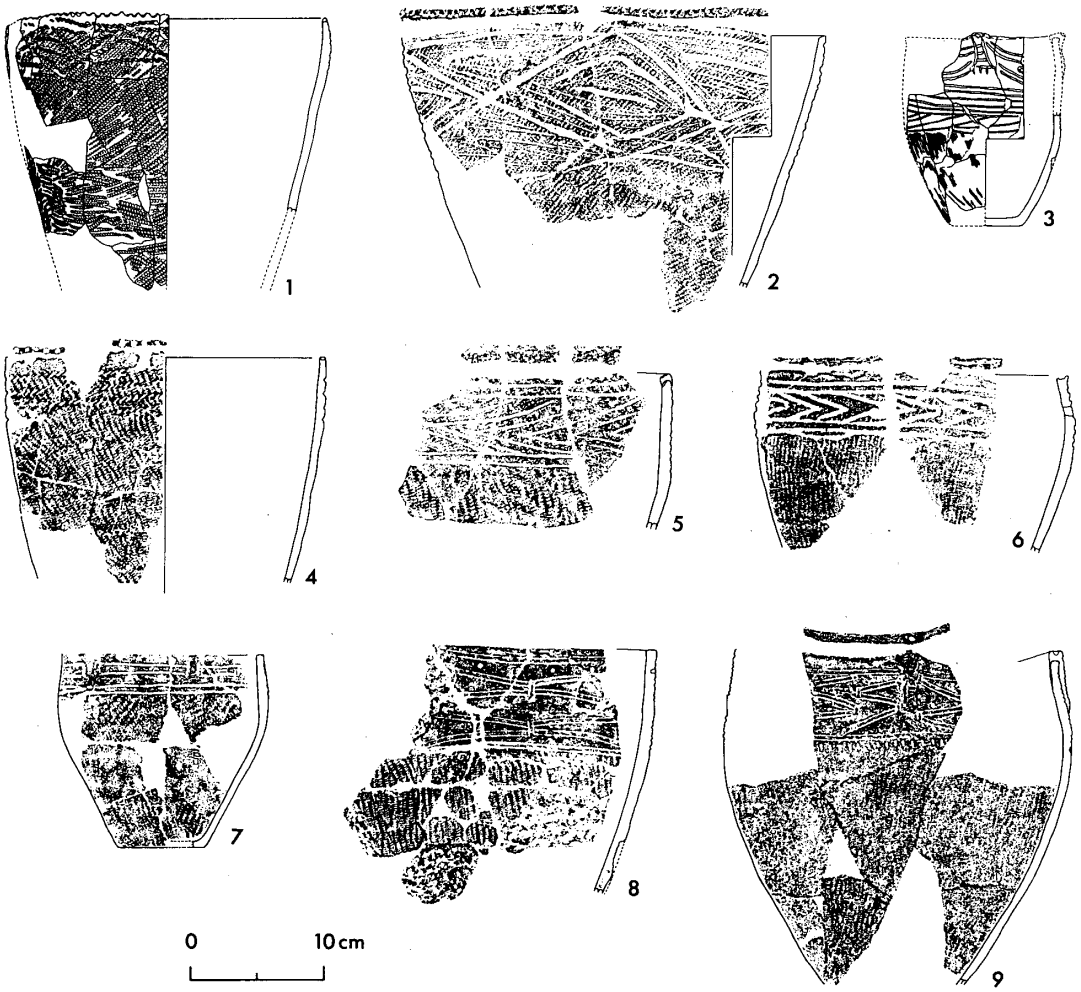


第１図　栄浦第二遺跡13号竪穴ホ号床面出土土器群（抜粋）

器種	0単位	2単位	4単位
大型深鉢	4		2
小型深鉢	3		1
大型浅鉢			1
小型浅鉢			1※
小型舟形		1※	
計	7	1	5

第１表　栄浦第二13ホ号土器群の文様単位別個体数(註19)

※は突起が片側によった特殊な単位（大型浅鉢），あるいはその可能性があるもの（小型舟形）



第2図　栄浦第二・第一遺跡の土器群

位が存在すると思われる。特に注目すべき文様として，突起から縦に垂下する貼付文があげられる。この文様は，栄浦第二13ホ号例にはないが，他の幣舞式や併行する土器群の例では特に「舟形土器」〔鷹野1983〕などにみられ，主に2単位もしくは2＋2単位の突起に付加される。この貼付文は，栄浦第二・第一遺跡の土器群では少数ではあるが深鉢に認められ，後述するように宇津内式成立直前期の土器群まで存続する。

栄浦第二13ホ号と栄浦第二・第一の土器群の間で口唇部突起の変化をみると，口唇部の突起が小型化し，衰退していく傾向にある。また，浅鉢・「舟形土器」の衰退ないしは消滅に伴って，突起群が片側に寄った特殊な単位は消滅し，さらに，2単位・2＋2単位は鉢・深鉢に引き継がれるようである。すなわち，幣舞式段階にみられる2単位，4単位，2＋2単位の突起は，やや衰退しながらも縄文晩期末〜続縄文初頭へと存続するとみることができる。

2.2　その他の型式学的内容

栄浦第二・第一遺跡の土器群の型式学的内容に関して，上に述べた単位の問題以外は大貫氏が詳しく検討している。以下に簡潔にまとめておく。

器種組成・器形

栄浦第二13ホ号土器群が基本的に深鉢，浅鉢，「舟形鉢」の3器種を含むのに対し，栄浦第二・第一遺跡の土器群には「舟形土器」は認められず，浅鉢もわずかしか認められないようである。器種の単純化が生じているといえよう。ただし，釧路地域の緑ヶ岡式では「舟形土器」が存在するようであり〔鷹野1983〕，器種組成については資料の増加を待ってさらに検討する必要がある。

器形は，栄浦第二13ホ号土器群は底部が全て丸底ないし丸底風の平底であるのに対し，栄浦第一遺跡の土器群は平底が多い。

文様

栄浦第二13ホ号土器群は，口縁部に地文として縄文が施されているが，栄浦第二・第一遺跡の土器群の口縁部には地文の施されているものとないものがある。大貫氏の言うように「幣舞的な文様から変化したものには一部に地文をそのまま残したものが残り，亀ヶ岡式の影響を受けているものには地文が無いという傾向がある」〔大貫1995：533〕といえる。

栄浦第二・第一遺跡例に見られる工字文・変形工字文のモチーフは，栄浦第二13ホ号土器群には認められない。ただし，第1図4の土器のモチーフは，工字文を模した可能性がある。

一方，釧路地域の緑ヶ岡式の特徴〔鷹野1981〕と比較すると，特に文様が異なっており，栄浦第二・第一遺跡の土器群には綾くり文，貝殻腹縁文，条痕文がほとんど見られない。

2.3　編年と類例

以上の点から，栄浦第二・第一遺跡の土器群は大貫氏の述べるように幣舞式の後半段階に後続するといえる。よって，縄文晩期末～続縄文初頭に位置づけられるが，器種組成・文様などの型式学的な特徴は，釧路地域の緑ヶ岡式土器とはやや異なるようである。

工字文を持つ土器群だけに注目した場合でも網走地域における類例としては，佐藤氏，金盛氏のあげた各遺跡に加え，常呂川河口遺跡〔武田編1996〕，尾河台地遺跡〔金盛ほか1983〕，オンネベツ川西側台地遺跡〔松田1993〕などの例があり，一定の型式学的類似性と，ある程度の地域的広がりが認められる。

これら網走地域の縄文晩期末～続縄文初頭の土器群に対して土器型式を設定する際には，釧路地域の緑ヶ岡式や道央のタンネトウＬ式・大狩部（おおかりべ）式などの再検討を含めた，縄文晩期末～続縄文初頭のいわゆる「非大洞系」〔林1981〕土器群全体の再構成が必要となる。しかし，それは遺憾ながら筆者の力量をこえた問題である。本稿では，網走地域における当該時期の土器群の具体的な内容

が，以上のようなものであることを指摘するにとどめ，宇津内式土器の成立過程を検討する際の基礎資料としたい。

3．宇津内式成立直前期の土器群

縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と，宇津内式土器との間に，1～2型式の土器群が存在することは，冒頭に述べたように宇田川氏や金盛氏らによって指摘されている。しかしながら，それら宇津内式成立直前期の土器群については，資料がごく限られていたこともあり，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群から宇津内式土器に至る具体的な変遷過程は不明な部分が多かった。しかし，元町2・3遺跡〔荒生・小林1986，同1988，荒生1988，同1994〕でややまとまって出土した土器群は宇津内Ⅱa式成立直前期に位置づけることができ，宇津内式土器の成立過程を解明する上で重要な資料である。

元町2遺跡の報告者である荒生健志氏は，出土した続縄文前半期の土器群（「第Ⅴ群土器」）を型式学的特徴を元に1～5類に分類している〔荒生・小林　1986〕。本稿で取り上げるのは，1類（「恵山式の影響がある」土器群）と，5類（「典型的な宇津内Ⅱa式」）の一部を除いた土器群である（第3図）。

本節では，これら元町2・3遺跡の土器群が，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式土器の中間的様相を呈していることを明確にするため，以下のような分析を行う。

1．まず，前後する土器型式との，縦の文様単位数の比較を行うため，元町2・3遺跡の土器群の口唇部突起数について確認する。

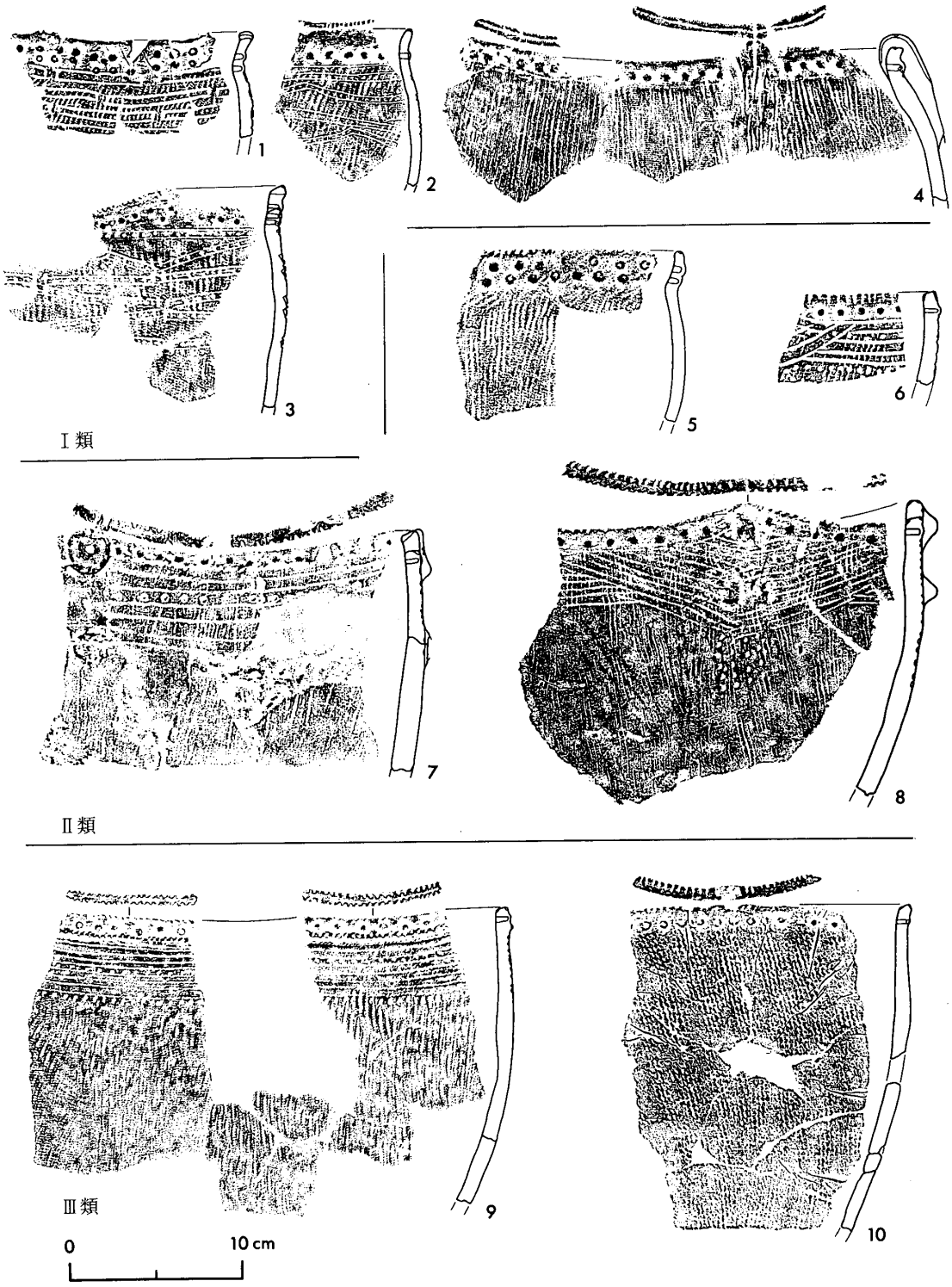
2．次に器形・文様の諸属性について，系統関係の指標となるような属性に注目し，それらの諸属性が元町2・3遺跡の土器群の中でどのように組あわさっているかを示す。

3.1　文様単位数（口唇部突起数）

完形土器が少ないため単位数ははっきりしないが，平縁（0単位）の土器が多く，突起を有する土器では2単位と4単位が存在するようである。先述の「突起から縦に垂下する貼付文」が存在することからも明らかなように，元町2・3遺跡の土器群の文様単位数は縄文晩期末～続縄文初頭の土器群からの伝統を残しているが，特に栄浦第二13ホ号の例と比較すると，元町2・3遺跡の土器群では明らかに0単位（平縁）の割合が増加している。すなわち，先述したように，幣舞式からこの元町2・3遺跡の土器群にかけて，土器の口唇部に2ないしは4の単位の突起をつけるという割り付け法が衰退していくことがわかる。この文様の縦の割り付け原理の衰退は，後続する宇津内Ⅱa式初頭の時期にもっとも進行し，口唇部に突起を有する土器は一時期ほぼ消滅する。

3.2　器形・文様の属性

器形・文様に関する諸属性のうち，特に鍵となるのは，以下の項目に関する属性である。各項目



第3図　元町2・3遺跡の土器群（「元町2式」）

1・5・6・10　元町2〔荒生・小林1986〕，2　元町3〔荒生・小林1988〕，3・4・7・8　元町3〔荒生1988〕，9　元町3〔荒生1994〕

について，元町２・３遺跡で認められる属性の主なものを記述してみよう。

A. 器形

a. 胴部はやや丸みを帯び，口唇部直下で僅かにすぼまり，外反するもの。口唇直下屈曲部の内面には稜が作られることがある（第３図１・２・３・５）。

b. 単純な深鉢形で，口縁部は垂直に近く立ち上がる（第３図６～10）。

B. 口唇部・口縁部の形態

B.1 断面の形態

a. やや尖り気味になるもの（第３図２・５）。ナデ調整による平坦面はない。

b. ナデ調整によって平坦面が作り出されているもの（第３図１・３・４・６～10）。平坦面が内傾しているものもある。

B.2 突起の種類

a. 突起ないしは波状口縁を有するもの（第３図１・３・４・７）。突起の頂部には刻みが施され，いわゆる「B状突起」の形態をなす。

b. 突起ないしは波状口縁を有するが，突起の頂部に刻みを有さないもの（第３図８）。

c. 突起を有さないもの。

C. 文様

C.1 地文の原体

a. LRの縄文。

b. Rの撚糸文。

c. RLの縄文。

C.2 口唇部文様

a. 口唇上に刻み目を縦位に施す（第３図２・５）。

b. 口唇部内縁と外縁，もしくは外縁のみに刻み目を施す。口唇部形態bとのみ結びつく（第３図３・６～10）。

c. その他の文様。縄文を施すもの，縄線文をめぐらすもの（第３図４）などがある。

d. 無文。

C.3 口縁部文様

C.3.1 突瘤文

a. ２列の突瘤文（第３図１・５）。

b. １列の突瘤文。

c. 突瘤文無し。

C.3.2　文様の意匠

a. 工字文・変形工字文のモチーフ（第3図1・3）。

b. 1～3本程度の水平の平行線のモチーフ。下端に刺突列を持たないものが多い（第3図4）。

c. 斜めの平行線のモチーフ（第3図6・8）。

d. 多数の水平の平行線のモチーフ。下端に刺突列をめぐらしていることが多い（第3図7・9）。

e. 無文。

C.3.3　施文具

a. 棒状の工具。先端がささくれ立っている中空のものが多い。突瘤文，沈線文，沈線文下縁の刺突列の全てに同じ工具を用いたと思われるものも多い。

b. 縄。

C.3.4　貼付文の意匠

a. 縦の貼付帯。口縁部突起の頂部より垂下する（第3図4）。

b. 円盤形（第3図7）。

c. 口唇下を横にめぐる貼付文（第3図9）。

d. 貼付文無し。

器形・文様に関するこれらの諸属性を，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群・宇津内式の属性と対比させると，3つのグループが抽出できる。各グループを属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとして内容をみてみよう（第2表）。

属性Ⅰ：縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と共通し，宇津内式にはない属性

これらの属性には，幣舞式以来の在地の伝統的属性と，道東以西の土器群に由来すると思われる属性の二者がある。前者として特徴的なのは口縁部文様施文具a，貼付文の意匠aである。

一方，道東以西の属性としては口唇部突起a，口縁部文様意匠aがあげられる。これらの属性は先行する縄文晩期末～続縄文初頭の土器群の段階ですでに取り入れられているため「先行する土器群と共通する属性」とした。

口唇部断面形態aは先行する土器群と共通するが，これらの属性は，幣舞式以来の在地系の伝統・道東以西の特徴の両者に共通するため，系統は不明である。

なお，宇津内式にも少数認められるため，属性Ⅰとするにはやや問題があるが，縄文晩期末～続縄文初頭と共通する属性がある。地文原体a，口唇部文様a，口縁部文様意匠bである。これらの系統も不明である。

				属性Ⅰ	属性Ⅱ	属性Ⅲ	属性Ⅳ
器形			a		○		
			b				○
口唇部・口縁部の形態	断面形態		a	○			
			b				○
	突起の種類		a	○			
			b				○
			c				○
文様	地文の原体		a	○			
			b			○	
			c			○	
	口唇部文様		a	○			
			b		○		
			c				○
			d				○
	口縁部・胴部文様	突瘤文	a		○		
			b			○	
			c				○
		文様の意匠	a	○			
			b	○			
			c		○		
			d			○	
			e				○
		施文具	a	○			
			b				○
		貼付文の意匠	a	○			
			b		○		
			c			○	
			d				○

第2表　元町2・3遺跡出土土器群の属性分類表

属性Ⅱ：元町2・3遺跡独自の属性

突瘤文aである。また，器形a，口唇部文様b，口縁部文様意匠c，貼付文bは宇津内式にも少数ずつ認められるが，これらの属性は網走地域では元町2・3遺跡の段階で特徴的にみられるようである。

属性Ⅲ：宇津内式と共通し，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群にはない属性

これまで宇津内Ⅱa式の前半に位置づけられてきた土器群に特徴的な属性は，地文の原体bおよびc，突瘤文b，口縁部文様意匠d，貼付文の意匠cである。

なお，縄文晩期末～続縄文初頭と宇津内式の両者に共通する属性は，第2表では属性Ⅳとしてまとめておく。

3.3　元町２・３遺跡の土器群の分類と編年

上に分類した属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは，それぞれ縄文晩期末～続縄文初頭，元町２・３遺跡，宇津内式それぞれの土器群に関わりの深い属性である。元町２・３遺跡の土器群は，一個体のなかでこれらの属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを複数あわせもっており，そのことこそが元町２・３遺跡の土器群の性格をあらわしている。すなわち，元町２・３遺跡の土器群は型式学的に縄文晩期末～続縄文初頭と宇津内式の中間に位置し，従来指摘されていた，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式との間のギャップを埋める内容を有する。

ここでは元町２・３遺跡の土器群の具体的な内容をわかりやすく記述するため，特徴的な属性や各属性の組み合わせのパターンに注目して，個々の土器について以下のような分類をあえて試みることにする。

元町２・３遺跡Ⅰ類：属性Ⅰが特徴的にみられ，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群の特徴が認められる土器群（第３図上）

沈線文による工字文・変形工字文のモチーフ（口縁部文様意匠ａ）や，口唇直下から垂下する縦の貼付文（口縁部貼付文ａ）が特徴的である。他の２つの類に比べ，量的にもっとも少ない。これらの土器群の多くは先に述べたように，２列の突瘤文（突瘤文ａ），１列の突瘤文（突瘤文ｂ），地文原体ｂ，口唇部文様ｂなど，次に述べるⅡ類，Ⅲ類と共通する属性も同時に有している。

なお，突瘤文が無く（突瘤文ｃ）口縁部文様意匠ｂを有するものが少数存在する。これらの土器群は，一見，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群そのもののようにも思われるが，やはりⅡ類，Ⅲ類と共通する属性も同時に有しており，Ⅰ類土器に分類される。

元町２・３遺跡Ⅱ類：属性Ⅱが特徴的にみられ，元町２・３遺跡独自の特徴を有する土器群（第３図中）

２列の突瘤文（突瘤文ａ），斜めの平行線のモチーフ（口縁部文様意匠ｃ），円盤形の貼付文（口縁部貼付文ｂ）は元町２・３遺跡の土器群に特徴的にみられるものである。

一方，元町２・３遺跡の土器群を特徴づけるような属性の組み合わせパターンがある。例えば，多数の平行線＋刺突（口縁部文様意匠ｄ）は属性Ⅲであるが，施文具ａと組み合わさった場合，すなわち宇津内式に特徴的にみられる，縄線文＋縄による刺突による文様が沈線＋刺突で置き換わっているような文様構成は，宇津内式にはない元町２・３遺跡独自のものである。また，口縁部文様意匠ｂは属性Ⅰとすべきであるが，突瘤文ａ・ｂと組み合わさる例は元町２・３遺跡に特徴的なものとしてよいであろう。

元町２・３遺跡Ⅲ類：属性Ⅲを多く有し，宇津内Ⅱａ式とほぼ同じ特徴を有する土器群（第３図下）

1列の突瘤文（突瘤文b）を有し，口縁部文様が地文以外は無文（口縁部文様意匠e）か，または多数の縄線文＋縄端の刺突（口縁部文様意匠c＋施文具b）である例。宇津内Ⅱa式と型式学的にほぼ同じ内容であるが，口唇部文様bが施される点，器形a，地文原体a・bなどがやや多く認められる点は，従来，宇津内Ⅱa式としてとらえられていた土器群と比較してやや特異であるといえる。

以上の分析をまとめてみよう。元町2・3遺跡の土器群は，全体として宇津内Ⅱa式に近い印象を受けるが，実際には縄文晩期末～続縄文初頭の土器群に近い属性や，元町2・3遺跡独自の属性を内包している。それらの属性のあらわれ方は個々の土器でやや異なっており，特徴的な器形・文様に注目すると，元町2・3遺跡独自の属性が特徴的なⅡ類を軸として，縄文晩期末～続縄文初頭の特徴が認められるⅠ類，宇津内Ⅱa式とほぼ同じ内容を有するⅢ類と，3つのタイプに分類することも可能である。

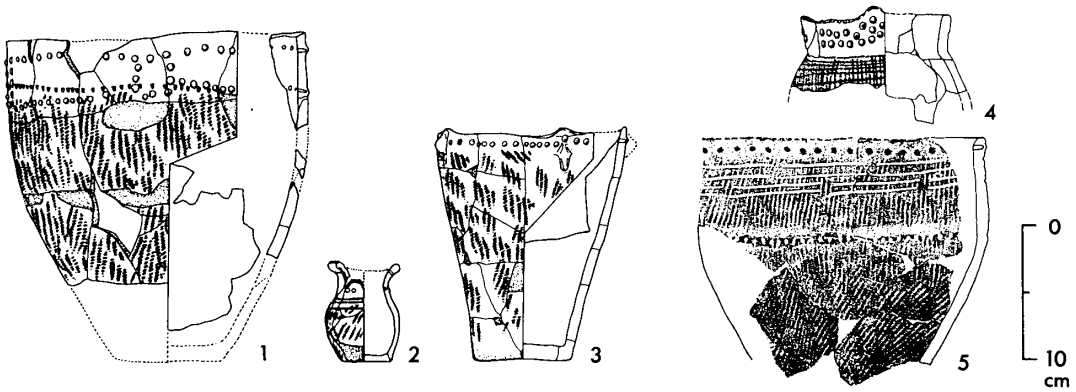
これらの3タイプの編年をⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類と仮定することも可能であるが，3タイプ間で共通する諸属性の存在や，個体内での属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの複雑な絡み合いを考えると，これらの3タイプは時間的に重なりあうとみたほうがよいであろう。すなわち，これら3タイプで一型式としてのまとまりを有すると考えられる。以下，本稿ではこの土器群を「元町2式」と仮称し，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内Ⅱa式との間に位置する土器型式として設定する。

本節での目的は，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式の間の型式学的ギャップを埋め，両土器型式間の変遷過程を理解することにあった。本節で提示したⅠ～Ⅲ類の分類は細分型式として位置づけられこそしないが，この3タイプの分類によって，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内式土器の間の変遷過程が比較的スムーズであることが理解できると同時に，両者の間には独自の特徴を有する土器型式が存在することが明らかになったと思われる。本節での分類の意義はその点にこそある。

3.4 分布と層位的出土例

この「元町2式」土器の例としてまずあげられるのは尾河台地遺跡42号竪穴のセット資料（第4図1～3）である。第4図1は，2列の突瘤文（突瘤文a），及び中空の施文具（施文具a）を斜め上方に刺突してつけた刺突文を有する。Ⅱ類に分類できる。第4図2は2単位のB状突起（突起a）に一列の突瘤文，3条の沈線文を有する。Ⅰ類である。第4図3は4単位の突起と突起下の縦の貼付文（貼付文a），及び口縁部に一列の突瘤文を有する。これもⅠ類としてよい。このセットの中には一般的な宇津内Ⅱa式は含まれておらず，この時期の土器型式のまとまりの実在を証明する資料といえる。

網走地域におけるその他の例としては，栄浦第二遺跡〔東大編1972：Fig. 9〕（第4図5），常呂川河口遺跡〔武田編1996：pit121，pit144例など〕，網走市南8条〔松下ほか1964：Fig. 9〕，昭和



第4図 「元町2式」
1・2・3 尾河台地42号，4 栄浦第二13ハ号埋土，5 栄浦第二

遺跡〔大場・奥田1960：第58図9〕，チプスケ遺跡〔田沢ほか1959：第13図版E－18〕などの各例があげられる。各資料とも断片的ではあるが，この「元町2式」が元町2・3遺跡だけに限定されるのではなく，網走地域の中で広く分布していることがわかる。この点も筆者が縄文晩期末～続縄文初頭の土器群と宇津内IIa式の間に一型式を設定する根拠の一つである。

北見市中ノ島遺跡〔久保1978〕で「第3群土器」に分類されている土器群の一部は，この「元町2式」と同時期であると思われるが，中ノ島遺跡例は釧路地域や道央地方の土器群とも強いつながりを持っているため，分析は別の機会にゆずりたい(註5)。常呂川河口遺跡〔武田編同上：第380図1など〕などの例についても同様である。

層位的な出土例としては，まず元町3遺跡〔荒生1994〕の例がある。ここではP-45というピットがP-47に切られている。各々の一括出土土器はP-47（II類）→P-45（宇津内IIa式）である。

一方，栄浦第二遺跡〔東大編1972〕13号竪穴ハ号埋土出土例（第4図4）はII類に分類できる。この資料は，層位的関係にはやや問題が残るものの，下層のホ号床面出土土器（幣舞式後半），上層のロ号住居址床面出土土器・イ号床面出土土器（いずれも宇津内IIa式）の間層にあたる位置から出土しており，参考になろう。

4．宇津内IIa式土器の編年

冒頭に触れたように，宇津内式土器については6細分型式にわたる細分案が宇田川氏によって示されているが，氏の細分案については疑問を呈する意見もある。宇津内式土器の編年を困難にしている理由の一つは，一括出土土器群に含まれる個々の土器どうしの間で，文様が大きく異なっている例が多いことにある(註6)。そのため，個々の土器の文様の型式学的変遷を基準に細分型式や段階を設定しても，実際に遺構に伴って出土する一括土器群では各型式・段階が共伴してしまう場合が生じ，各型式・段階の実在性が保証しづらいのである。さらに，一括土器群どうしの層位的関係がとらえられている例が少ないことも，いっそう編年作業を困難にしている。

このような現状を踏まえ，本章の分析では遺構に伴う一括土器群のセット内容を重視する。すなわち，個々の土器から仮定された型式学的変遷が，セットとして実在するかを検証するという手続きを踏む。

また，個々の土器の分類にあたっては，文様の縦の割り付け原理と単位数に新たに注目する。宇津内式における文様の縦の割り付け原理と単位数の問題についてはこれまで先学諸氏によって言及されたことはなかった。しかしながら，縦の割り付け原理と単位数が宇津内式土器を系統的・構造的に理解する上で極めて重要な概念であることが，筆者の分析によって明らかになるであろう。一方，貼付文の型式学的変遷過程〔佐藤1964，宇田川1977〕についても，縦の割り付け原理に従って分析し，セット関係の中で検証してみたい。

4.1 文様の縦の割り付けに基づく分類（第5図）

宇津内式IIa式土器の基本となる文様単位数は0単位，4単位，2＋2単位の3種類である。

0単位は，平縁で，文様の縦の割り付けを持たないものである（Ptype）（第7図1～3）。

4単位は，平縁で，口縁～胴部文様として，同じ形状の文様を4カ所均等に配置したものである。平縁ではなく，4単位全て同じ突起を有する土器も少数ではあるが存在する。平縁・突起有りのいずれの例も口縁部に貼瘤文を4カ所配置する例が多い（Qtype）。

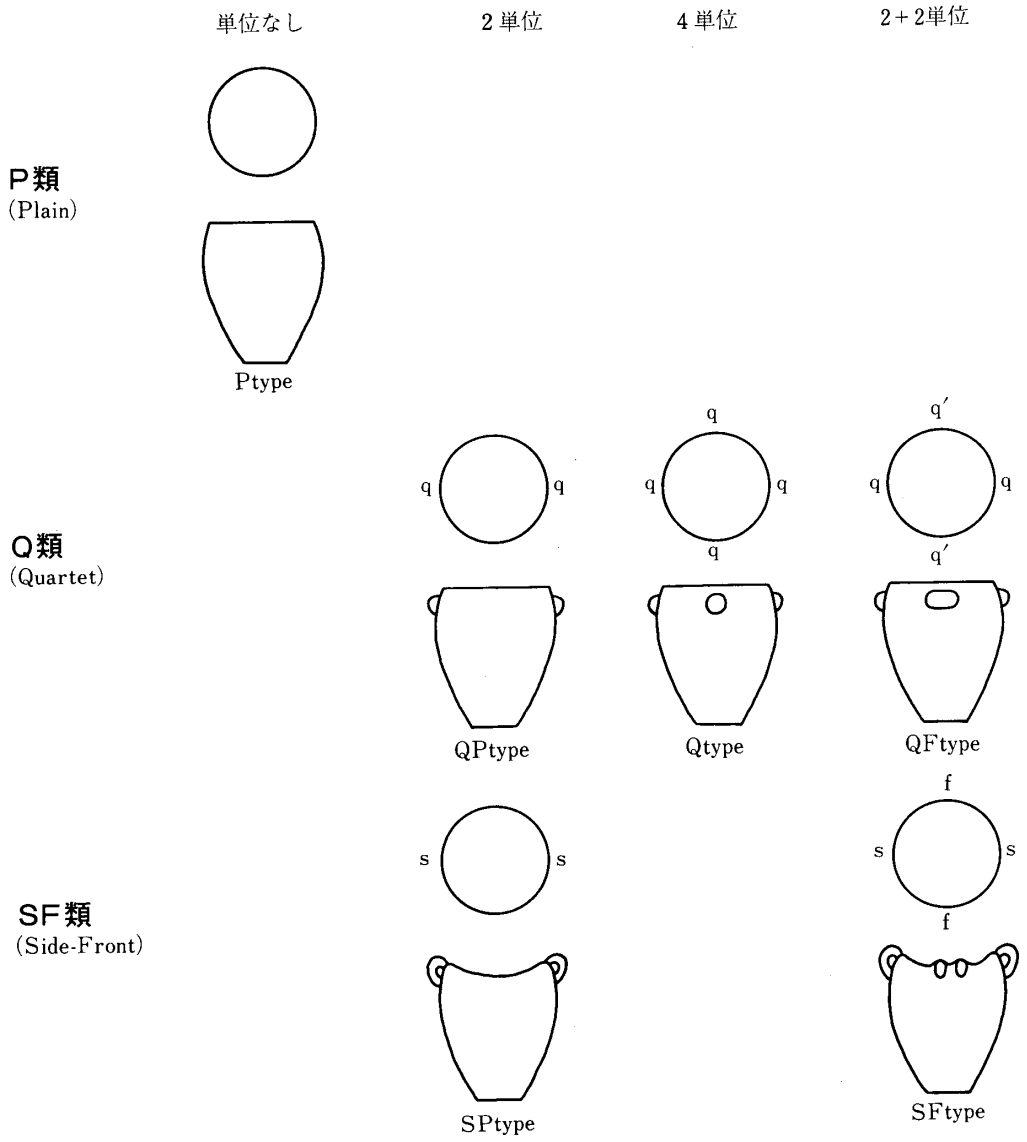
2＋2単位は，90°毎4カ所を割り付けの基点にするが，吊耳を1対貼付したり，口唇上の突起の1対を大型化することなどによって向かい合う組どうしに差異を生じさせ，土器の側面－正面観を強調するものである（SFtype）（第6図2，第7図7・9・10・12・13・14）。突起が4単位均等で吊耳を持たないものでも，口縁部・胴部文様が180°の対どうしで大きく異なる例はこの2＋2単位としてよいだろう。

宇津内IIa式には，これらの単位数の他に2単位の例も多く認められる。これらは器形・文様の特徴から2種類に分類できる。1種は，平縁で，貼瘤文などの比較的小さい1対の文様を施したもので，Qtypeの文様が1対欠落したものとしてとらえることができる（QPtype）（第7図4・8）。他の1種は1対の吊耳もしくは突起を有し，90°横の位置には対となる文様を有さないものである。SFtypeの「正面」の文様が欠落したものとすることができる（SPtype）（第6図1，第7図6[註7]・11）。このように，見かけ上が2単位の宇津内式土器は，4単位もしくは2＋2単位の割り付けを基本としており，4単位・2＋2単位それぞれのバリエーションとしてとらえることができる。

一方，単位数としては2＋2単位だが，平縁で，かつ対となる文様どうしの差がごく僅かなものがある。これもQtypeのバリエーションとしてとらえられるであろう（QFtype）（第7図5）。

また，例外的なものとして，5単位の例があるが，これは鈴木公雄氏の言う「追いまわし施文」〔鈴木1968，今村1983〕であって，一定した縦の単位数に基づく割り付けは意識されていないといえよう。すなわち，Ptypeのバリエーションとすることができる。

宇津内式土器の編年



第5図　文様の縦の割り付けに基づく宇津内IIa式土器の分類
qは4単位均等の文様，fは「正面」に位置する文様，sは「側面」に位置する文様をあらわす。

このように，文様の縦の割り付け原理と単位数をもとにして宇津内IIa式土器を分類すると，以下のようになる。

P類（Ptype）

一定の単位数をもたないもの。

Q類（Qtype・QPtype・QFtype）

4単位とそのバリエーションからなるもの。

SF類（SFtype・SPtype）

側面－正面観を強調した2＋2単位と，そのバリエーションからなるもの。

後にふれるように，宇津内IIb式土器はSF類のみから構成される。また，型式学的特徴からす

ると，Q類はP類から，SF類はQ類からの発展形としてとらえることも可能である。よって，型式学的には，P類→Q類→SF類の変遷が仮定できる。

4.2 遺構一括出土土器群の検討

宇津内Ⅱa式土器の個々の個体は，文様の縦の割り付け原理を基準にした場合，P類・Q類・SF類の3者に分類可能であり，その型式学的変遷はP類→Q類→SF類と仮定できた。これらの3者は一括土器としてはどのようなまとまりを有するのであろうか。遺構に伴って2個以上の完形土器が出土した一括出土例を対象に，P類・Q類・SF類の3者が，一時期におけるセットとしてはどのような組み合わせを有するのか見てみよう（第3表）。

遺跡・遺構	P	QP	Q	QF	SP	SF
尾河台地41号石組周辺	○					
ピラガ丘第Ⅱ24号床面	○	+				
常呂川河口21号床面	+	+				
尾河台地40号石組周辺	+		+			
栄浦第一7A号埋土	○	○			+	+
栄浦第一Pit58a	+	+		+	+	+
宇津内A地点9号床面	+				+	
栄浦第二17号床面	+					+
尾河台地31号床面		+			+	+
岐阜第二15号A面床面		+				○
宇津内B地点2号床面			+		+	
TK73　470号土壙			+		○	○
中ノ島H-46　2号墳墓			+			+
栄浦第一14号床面			+			◎
常呂川河口Pit260				+	+	
宇津内B地点1号床面				+		+
尾河台地12号墓					◎	
宇津内B地点3号床面					○	
尾河台地19号床面					○	
尾河台地6号墓					○	
尾河台地11号墓					○	
尾河台地7号床面					○	+
栄浦第一8号埋土					+	+
栄浦第一Pit35c					+	+※
TK67Pit32					+	+
ピラガ丘第Ⅱ27号床面					+	+
尾河台地29号床面					+	+
尾河台地7号墓					+	○※
宇津内A地点10号床面					+	◎
栄浦第一4F号埋土						○
栄浦第二Pit87						○

第3表　遺構一括出土宇津内Ⅱa式土器分類表（文様の割り付けによる）(註20)

＋・○・◎はそれぞれ1個体・2個体・3個体をあらわす。
※栄浦第一Pit35cのSFtypeは，「側面」の文様が脱落した特殊な例。尾河台地7号墓のSFtypeは宇津内Ⅱb式を含む。

Ⅰ群：P類・Q類のみから構成され，SF類を含まないセット

ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点24号竪穴床面出土土器群は，P類2例・Q類1例のみから構成され，この時期の好例となっている。先述のように，「元町2式」の多くがP類・Q類からなる事実も，この時期の存在を示唆している。

Ⅱ群：P類・Q類とSF類が混在するセット

栄浦第一遺跡〔東大編1985〕Pit58aはP類・Q類・SF類を全て含み，この時期の好例となっている。先に仮定したP類→Q類→SF類という変遷を考慮すると，このⅡ群はP類を含むセットと含まないセットに分けられる可能性がある。

Ⅲ群：SF 類のみから構成されるセット

宇津内遺跡 A 地点10号竪穴床面出土土器群は 4 例全て SF 類であり，このセットの存在を示している。

第 3 表はセット内における P 類・Q 類・SF 類の 3 者の組み合わせパターンを基準に各セットを序列化したものである。

この表の序列を編年とする前に，口縁部・胴部に施された貼付文についても検討してみよう。

4.3 貼瘤文・貼付文と縦の単位

貼瘤文・貼付文は宇津内式土器に特徴的な文様のひとつであり，佐藤氏や宇田川氏がその変遷過程をたどって編年の指標とした文様である。これら貼瘤文・貼付文を，文様の縦の割り付け原理と関連させながら分類してみよう。

貼瘤文

円形や，縦長・横長の楕円形をした瘤状の貼付文である（第 7 図 5 ・ 8 ）。口唇に接していたり，口唇より上部にせりだしているものは，貼瘤文と言うよりはむしろ口唇上の突起であるので，第 4 表では貼瘤文として扱っていない。

貼付文

a. 縄線文に平行する貼付文

縄線文に平行して（多くの場合は水平に）貼付文が施されているもの。縦の単位は意識されていない。

b. 縦 2 単位の貼付文

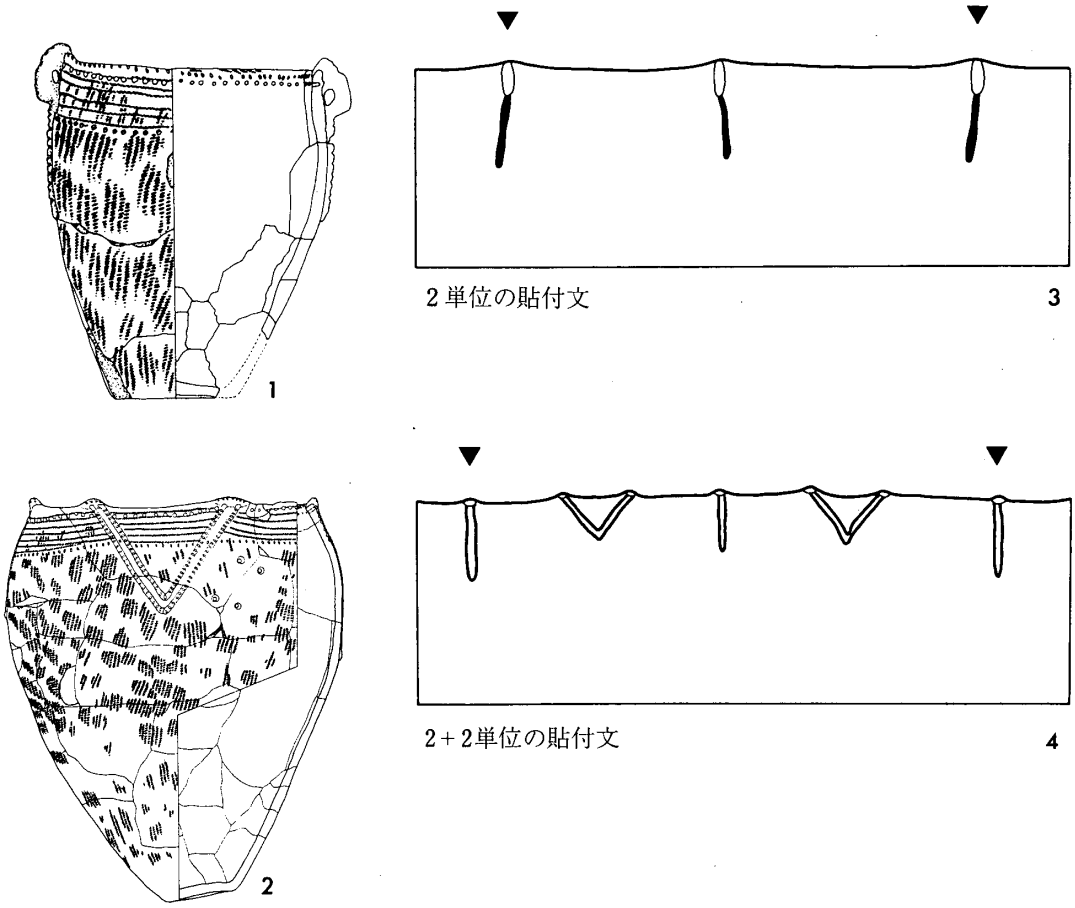
180°向かい合う位置に一対の同じ意匠の貼付文が施されているもの（第 6 図 1 ・ 3 ，第 7 図 7 ・11・12)。互いに横に連結する例もあるが，縦の単位としては 2 単位といえる。多くの場合では，2 ないし 2 ＋ 2 単位の口唇部突起によって割り付けられた縦の単位に従って施されているため，表の中の例では平縁に施された例はないが，平縁に施される例も例外的に存在する。ただし，いずれの場合にも縦 2 単位の貼付文は側面ないしは正面を強調する結果となるため，SF 類に分類できる。

c. 縦 4 単位ないしは 2 ＋ 2 単位の貼付文

90°毎に縦の文様単位を有する貼付文（第 6 図 2 ・ 4 ，第 7 図10・13・14)。4 単位すべて同じ意匠のものと，180°の対どうしで意匠が異なる 2 ＋ 2 単位のものがある。互いに横に連結する例も多い。ほとんどの場合，2 や 4 ，2 ＋ 2 単位の口唇部突起によって割り付けられた縦の単位に従って施されるため，SFtype に特徴的な文様であるが，平縁に 4 単位の貼付文が伴うなど，Qtype に分類できる例も例外的に存在する。

ここで注意しておくべきことは，a.縄線文に平行する貼付文　以外の貼瘤文・貼付文はほぼすべて口縁部の突起，すなわち縦の単位に従って割り付けられている点である。すなわち，貼付文を含む文様の縦の割り付けを第一に規定しているのは口唇部の突起であり，貼瘤文・貼付文の意匠を分析する際にはその点に注意を払わなければならない。

貼付文の意匠は，縦単独から横に連結する形へと複雑化していくことが，佐藤氏・宇田川氏によって指摘されている。



第6図　宇津内Ⅱa式の貼付文の展開図

縮尺不同。3は1の，4は2の展開図(註21)。▼は一回転をあらわす。1　尾河台地19号，2　尾河台地29号

次に先の第3表の序列はそのままに，各セット内の土器の貼瘤文・貼付文の意匠を分類すると第4表になる。注目すべきはⅡ群において，P類を含むセットには4ないしは2＋2単位の貼付文を持つ土器がみられない点であり，P類の土器と4ないしは2＋2単位の貼付文を持つ土器は同時期には共伴しない可能性が高い。

4.4　宇津内Ⅱa式土器の編年

以上の分析から，宇津内Ⅱa式の各セットは，以下の4段階に編年できる（第7図）。

遺跡・遺構	P類	Q類				SF類				
		貼瘤・貼付なし	貼瘤のみあり	縄線平行貼付	縦4単位貼付	貼瘤・貼付なし	貼瘤のみあり	縄線平行貼付	縦2単位貼付	縦2+2単位貼付
尾河台地41号石組周辺	○									
ビラガ丘第Ⅱ24号床面	○	+								
常呂川河口21号床面	+		+							
尾河台地40号石組周辺	+			+						
栄浦第一7A号埋土	○		+	+		+	+			
栄浦第一Pit58a	+	+	+			+			+	
宇津内A地点9号床面	+								+	
栄浦第二17号床面	+								+	
尾河台地31号床面		+				○				
岐阜第二15号A面床面			+				+			+
宇津内B地点2号床面			+				+			
TK73　470号土壙			+				◎		+	
中ノ島H-46　2号墳墓			+				+			
栄浦第一14号床面					+	+				○
常呂川河口Pit260			+						+	
宇津内B地点1号床面		+							+	
尾河台地12号墓						+			○	
宇津内B地点3号床面						+?	+			
尾河台地19号床面						+			+	
尾河台地6号墓						+	+			
尾河台地11号墓							+		+	
尾河台地7号床面							○			+
栄浦第一8号埋土						+				+
栄浦第一Pit35c									+	+
TK67Pit32						+				+
ビラガ丘第Ⅱ27号床面						+	+			
尾河台地29号床面							+			+
尾河台地7号墓							+			○
宇津内A地点10号床面									○	○
栄浦第一4F号埋土										○
栄浦第二Pit87							+		+	

第4表　第3表の分類と貼付文の意匠・単位の関係

＋・○・◎はそれぞれ1個体・2個体・3個体をあらわす

Ⅰ期

セットがＰ類・Ｑ類のみからなる時期。ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点24号竪穴の例からみると，セット中のＰ類の割合がＱ類より多いようである。

Ⅱ期

Ⅰ期のセットにSF類が加わる時期。ただしセット中に占めるのSF類の割合がＰ類・Ｑ類よりも少ないようである。４ないしは２＋２単位の貼付文を持つSF類はまだ存在しない。栄浦第一遺跡７Ａ号住居址埋土，同Pit58aが代表的な例である。

Ⅲ期

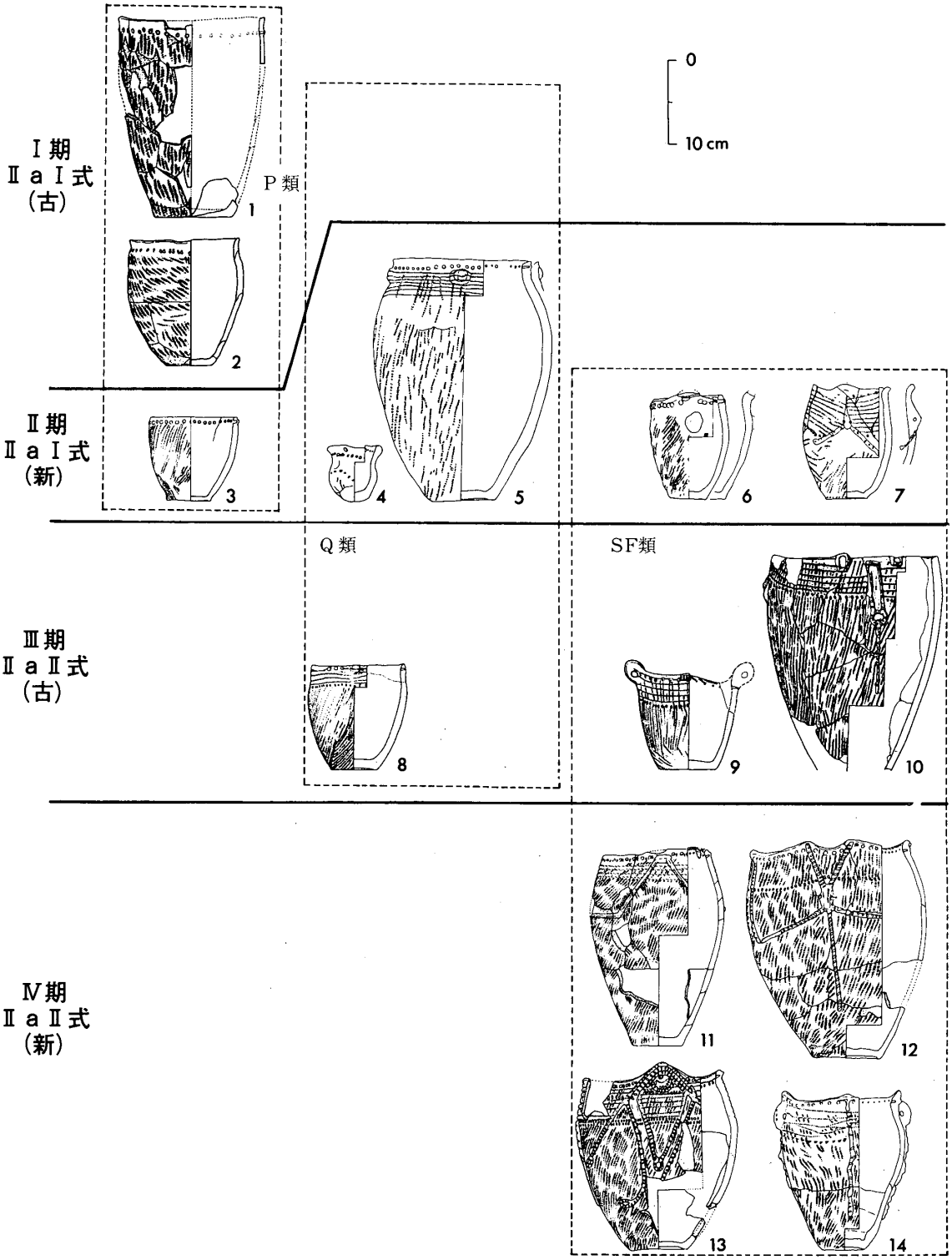
Ⅱ期のセットのＰ類が消滅し，４ないしは２＋２単位の貼付文を持つSF類が出現する時期。セット中に占めるSF類の割合がＱ類よりも多くなるようである。代表的な例として，岐阜第二遺跡15A住居址床面，栄浦第一遺跡14号住居址床面がある。

Ⅳ期

Ⅲ期のセットのＱ類が消滅し，SF類のみになる時期。後続する宇津内Ⅱｂ式がほぼSFtypeのみからなる点を考慮すると，新しい時期になるほどセット中のSPtypeの割合が減少し，SFtypeが増加すると仮定できる。ただし，尾河台地７号墓のセット中では，宇津内Ⅱｂ式とともにⅡａ式のSPtypeが存在しており，後述する岐阜第三遺跡〔東大編1977〕22号の例からみても，宇津内Ⅱａ式ではSFtypeのみでセットが構成されるまでには至らないようである。宇津内遺跡Ａ地点10号住居址床面などが代表的な例である。

Ⅰ～Ⅳ期の分類基準にあてはまらない内容のセットもある。セットを構成する個体数が少なく，一時期における本来のセットの様相が確認できないことに原因の多くが求められると思われる。ただし，TK73(常呂川河口)遺跡〔武田1995〕470号土壙の例などのように，ある程度の個体数を有していても分類基準を満たさないセットもある（第４表)。このTK73 470号土壙を例に取れば，このセットは縦の単位の分類ではⅢ期に含まれるが，４ないしは２＋２単位の貼付文を持つ土器を含んでいない。これはⅡ期～Ⅲ期の中間的な様相を示している。

このように，筆者のⅠ～Ⅳ期の編年は，各細分段階のまとまりが実在するか否か，という点で検討の余地を残している。しかし，各期の分類基準を満たさない中間的な内容をもつセットの存在は，宇津内Ⅱａ式における型式学的変遷の連続性の強さを反映したものであって，宇津内Ⅱａ式における型式学的変遷の過程そのものは，縦の文様の割り付け原理を柱とする型式の構造が緩やかに変化するかたちで推移していくのであろう。それゆえ，宇津内Ⅱａ式の編年を考える上で，筆者の提示した型式構造と，その変遷過程の理解こそが重要な意味を持つのである。



第7図　宇津内Ⅱa式土器編年図

1～3　Ptype,　4・8　QPtype,　5　QFtype,　6・11　SPtype,　9　SFtype（貼瘤文のみあり），
7・12　SFtype（2単位の貼付文），10・13・14　SFtype（2＋2単位の貼付文）
1・2　尾河台地41号，3～7　栄浦第一 Pit58a，8～10　岐阜第二15号A，11～14　宇津内A10号

以上のⅠ～Ⅳ期の各段階を細分型式として再編成してみよう。型式としてのまとまり，という点で，P類と2＋2単位の貼付文を有する土器とが共伴しないことを重要視してみたい。すなわちⅠ・Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期の間に細分型式を設定して，それぞれ宇津内ⅡaⅠ式・ⅡaⅡ式とし，それぞれに古段階・新段階を設定する。つまり，

・宇津内ⅡaⅠ式古段階・・・Ⅰ期
・宇津内ⅡaⅠ式新段階・・・Ⅱ期
・宇津内ⅡaⅡ式古段階・・・Ⅲ期
・宇津内ⅡaⅡ式新段階・・・Ⅳ期

のようになる。

4.5 「元町2式」土器との関係

「元町2式」と，宇津内ⅡaⅠ式古段階は，器形・文様の上で非常に共通点が多く，両者の変遷はスムーズにとらえられる。ここでは詳述しないが，例えば，前節で分類した元町2・3遺跡Ⅲ類と，尾河台地遺跡40号石組周辺出土の土器群〔金盛ほか1993：第152図1・2〕を比較してみれば共通点が多いことは明らかである。

「元町2式」土器と宇津内Ⅱa式土器との間の変遷をとらえる上で注意すべき点は，両型式の間の縦の文様単位の関係である。「元町2式」土器では，突起を有する例が存在し，それらの単位は2単位，4単位である。それに対し，宇津内ⅡaⅠ式古段階のセットには4単位のQtypeこそ見られるものの，平縁の例であって突起を有する例は確認できない。突起がみられるようになるのは，次の宇津内ⅡaⅠ式新段階からである。宇津内ⅡaⅠ式新段階にみられる2＋2単位の突起と，「元町2式」の2ないしは4単位を直接連続させることで，宇津内ⅡaⅠ式古段階の実在を否定することも一見可能なようにみえるが，筆者は以下に記すような理由から，縄文晩期以来の2ないしは2＋2単位の突起と，宇津内式の2＋2単位の突起を直接連続させることはせず，2＋2単位の割り付けを持たない宇津内ⅡaⅠ式古段階を実在するものとみなす。

「元町2式」土器に見られる突起の形態の多くはB状突起，ないしは突起の頂部より垂下する縦の太い貼付帯を伴う突起であり，縄文晩期末～続縄文初頭の土器群の伝統を受け継ぐものである。尾河台地遺跡42号竪穴のセット例も同様である。このような形態の突起は，宇津内Ⅱa式には認められない。

これらの例の他に，「元町2式」には，B状の刻みや縦の貼付帯を伴わない4単位の突起も，栄浦第二遺跡13ハ号埋土の例などに存在する。だが，宇津内Ⅱa式の突起の配置・形態はこれらの例とは異なっており，4単位均等の突起というのはまれである。宇津内Ⅱa式の4単位＝Qtypeは平縁が基本であって，例外的に見られる4単位ほぼ均等の突起を有する例には，むしろ2＋2単位の

SFtypeのバリエーションとも考えられるものもあり，第Ⅲ期以降に位置づけられるものが多い。

このように，宇津内ⅡaⅠ式新段階以降に見られる2ないしは2＋2単位の突起の形態は，縄文晩期的な特徴を有しておらず，「元町2式」との間には断絶がある。「元町2式」土器に見られる2ないし4単位の突起は，縄文晩期からの伝統上に位置づけられるものであって，これらの突起は幣舞式以降衰退し，宇津内ⅡaⅠ式古段階にはほぼ消滅する。

縦の文様単位の系統については，本稿の最後で再び考えてみたい。

5．宇津内Ⅱb式土器の編年

5.1　宇津内Ⅱa式とⅡb式の差

宇津内Ⅱb式について検討する前に，宇津内Ⅱa式とⅡb式の差異について金盛氏の指摘〔金盛1973,1982〕を引用するとともに，少し補足を加えてみよう。

器形

口唇部断面形が，Ⅱa式は平らか丸味を帯びているのに対し，Ⅱb式では鋭角をなす〔金盛1973〕。

底部はⅡa式が平底・上げ底両方の形態を有するのに対し，Ⅱb式では上げ底のみになる〔金盛1973〕。

この2点に加えて，ここでは，壺型の器形はⅡa式にほぼ限られる点を指摘しておきたい。

文様

Ⅱa式は突瘤文を有するものが多く，Ⅱb式では失われる〔金盛1982〕。

貼付文は，Ⅱa式は断面形が半円形であるのに対し，Ⅱb式の断面は三角形で，器面を縦横にめぐらされる〔金盛1973〕。

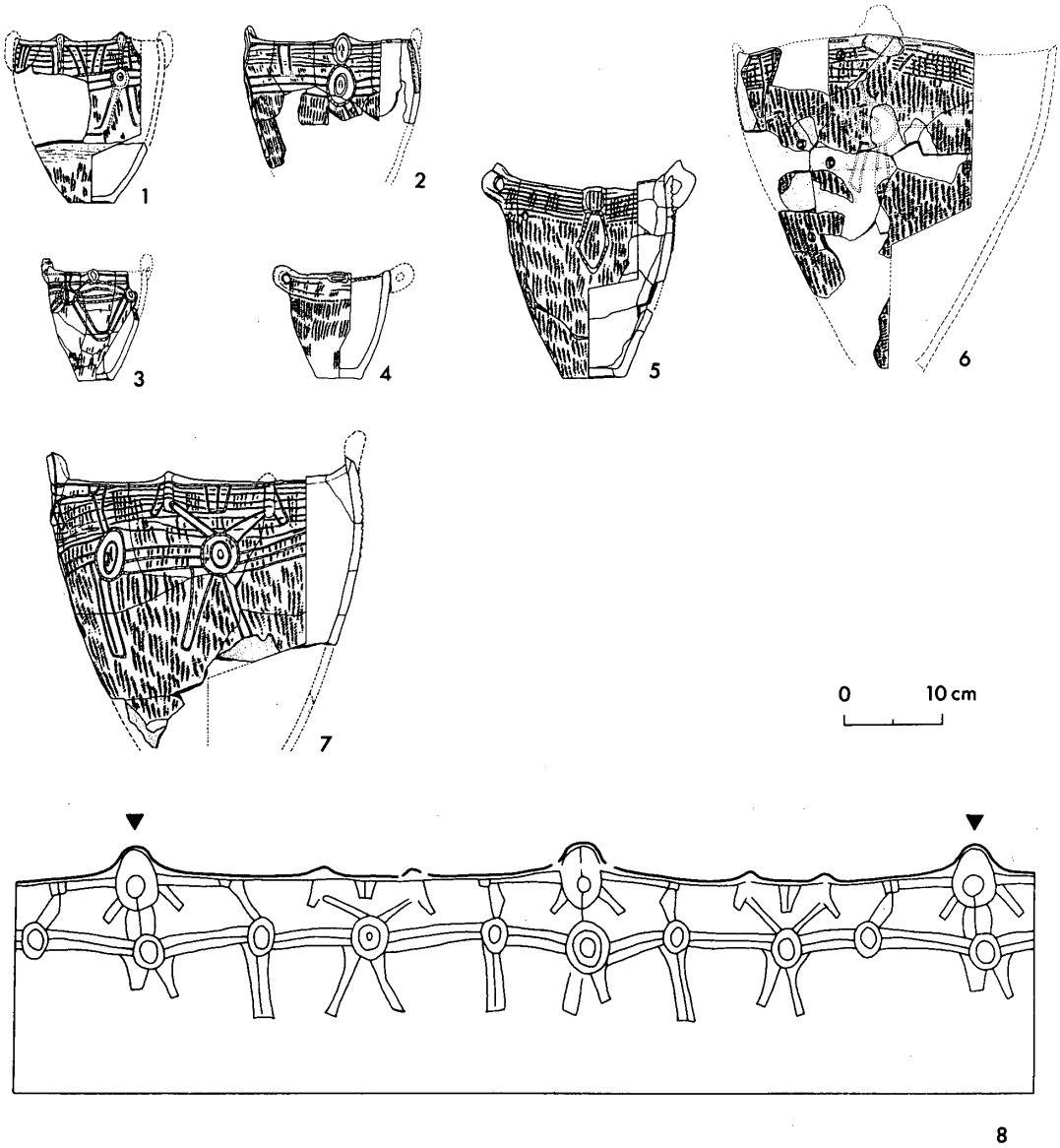
ここでは以下の点を補足しておく。

地文の原体は，Ⅱa式がRLの縄文の例を主体にしながらも，LRの縄文，Rの撚糸文の例を含むのに対し，Ⅱb式では条が縦走するRLの縄文の例にほぼ統一される。

施文順は，金盛氏も指摘している〔金盛1996〕が，Ⅱa式の多くが地文→貼付文・貼瘤文→縄線文→突瘤文・縄端圧痕文の順であるのに対し，Ⅱb式では，多くの例が地文→縄線文→貼付文と，縄線文と貼付文の施文順序が逆になっている。これは，口縁部の縄線文が，いわば「地文化」してしまったことを意味する。

貼付文の形状としては，断面形の差異の他に，貼付文上に施された縄端の刺突の，細かさに差がある。Ⅱb式の貼付文上の刺突は施文の間隔が細かく，施文も浅い。これはⅡb式の次の段階での「微隆起線化」につながってゆく。

貼付文の意匠をみると，Ⅱb式では口唇部直下に貼付文が口唇に沿ってめぐっているという特徴がある。これは後北式との関係を考慮する必要がある。縦の単位については後述する。



第8図　尾河台地遺跡27号竪穴床面出土土器群
8は7の展開図(註21)。▼は一回転をあらわす。4・5　SFtype，1～3・6・7　SF＋4type

宇津内式土器がⅡa式・Ⅱb式の2型式に細分され，この2型式の実在性と編年が確定していることは本稿の冒頭に述べた。しかし，そこでもふれたが，Ⅱa式とⅡb式は型式学的に連続性が強く，また実際に尾河台地遺跡7号墓のセット内ではⅡa式とⅡb式が共伴している。Ⅱa式・Ⅱb式が共伴するという事実は，Ⅱa式・Ⅱb式の連続性をよくあらわすと同時に，共伴例がこの1例のみであることはまた，Ⅱa式・Ⅱb式という2型式の実在性を示す結果にもなっている。

5.2　縦の文様単位数と突起・文様

宇津内Ⅱb式土器（第8図）は，縦の文様単位による分類をⅡa式と同じ基準で行うと，ほぼ全

ての個体がSF類に分類される。ⅡaⅡ式新段階との違いは，SPtypeがほぼ消滅し，SFtypeのみでセットが構成される点である。特に口唇部の突起数に注目すると，一部の例外を除き，全ての例が2＋2個，または2＋4個（「正面」に位置する突起が2個1組となっている）の突起を有するようになる。

また，口縁部・胴部文様にも変化が現れる。Ⅱa式とⅡb式の貼付文の意匠の違いは先にも少し述べたが，口唇直下の貼付文の付加に加えて重要な点は，2＋2単位の口縁部～胴部文様の，各単位と単位をつなぐ中間部に新たに貼付文による縦の割り付けが加わることである（SF＋4type）（第8図1～3・6～8）。新たに割り付けられた部分の意匠には，口縁部に縦の貼付文が短く施されるものと，同心円状の貼付文が2＋2単位の単位間を連結するように施されるものがある。このように，新たな割り付けが加わるSF＋4typeであるが，2＋2単位の割り付け原理そのものは変化していない。

なお，後述するように，後続する土器型式では全ての個体がSF＋4typeとなるので，型式学的にはSFtypeからSF＋4typeへという変遷が仮定できる。

5.3　遺構一括出土土器群の検討

遺構に伴う一括土器群内におけるSFtypeとSF＋4typeのあり方を示したのが第5表である。SFtype主体のセットからSF＋4type主体のセットへ，という連続的な変遷をみることも可能である。ただし，岐阜第三遺跡22号の例ではⅡa式に近いSPtypeと，SF＋4typeが共伴している点を考慮すると，SFtype・SF＋4typeの分類から宇津内Ⅱb式を細分するのは難しいようである。ここでは，宇津内Ⅱb式土器の型式学的変遷の最終段階では，2＋4個の突起を有するSF＋4typeがセットの主体を占めるようになると指摘するにとどめたい。

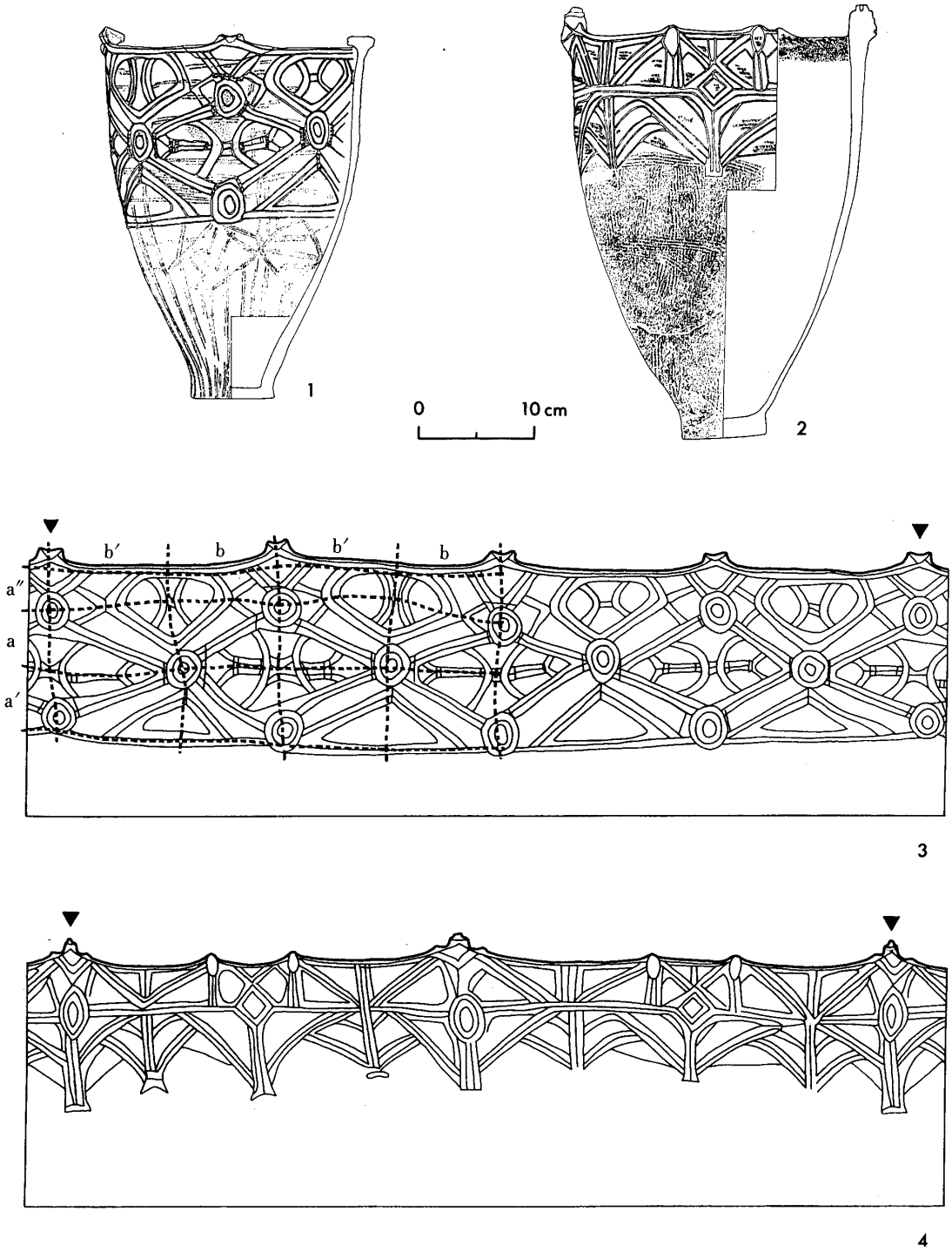
遺跡・遺構	SP	SF	SF+4
岐阜第三22号床面直上	＋	＋	＋
常呂川河口Pit261		○	
宇津内A地点5号床面		○	
尾河台地26号床面		○	＋
栄浦第一Pit16a		＋	＋
宇津内A地点3号床面		＋	＋
尾河台地3号床面		＋	＋
尾河台地27号床面		○	●
尾河台地9号床面		＋	◎
宇津内A地点2号床面			○
尾河台地15号床面			○

第5表　遺構一括出土宇津内Ⅱb式土器分類表（文様の割り付けによる）(註20)

＋・○・◎・●はそれぞれ1個体・2個体・3個体・5個体をあらわす。

5.4　微隆起線を有する土器群

宇津内Ⅱb式に関連して，これまで検討してきた宇津内Ⅱb式とはやや異なる特徴を有する土器群がある。貼付文上の刻みが消滅し，貼付文がいわゆる「微隆起線」になる土器群である。これらの土器群の縦の文様単位数は，口縁部の突起は2＋2単位（多くの例は2＋4個）であり，全ての土器がSF＋4typeに分類される。



第9図　岐阜第二遺跡 Pit28出土土器群

3は1の，4は2の展開図(註21)。▼は一回転をあらわす。1　後北 C_1 式，2　宇津内IIbII式（微隆起線土器II類）

これらの土器群，すなわちSF＋4typeで微隆起線を有する土器群は，型式学的には2つのタイプに分類可能である。

微隆起線土器Ⅰ類：SF＋4typeの宇津内Ⅱb式土器の，貼付文が微隆起線に変化したもの（第8図2）口縁部縄線文が消滅する例もある。

微隆起線土器Ⅱ類：Ⅰ類の土器の地文として帯縄文が施されるもの（第9図2）。口唇直下の微隆起線が横に2本施されるようになる。口縁部・胴部の微隆起線は横・斜めへの連関を強め，より複雑化する。

これら微隆起線土器Ⅰ類・Ⅱ類は，型式学的にはⅠ類→Ⅱ類という変遷が仮定できる。

また，これらの土器群は出土例が少ないことから，型式としてのまとまりを検討するのは難しいが，現状では以下のように考えることができる。

微隆起線土器Ⅰ類については，尾河台地遺跡27号竪穴で，先に検討した宇津内Ⅱb式と共伴しており，土器型式としては前述の宇津内Ⅱb式としてとらえるのが妥当であろう。

微隆起線土器Ⅱ類については，先に検討した宇津内Ⅱb式との直接的な層位的関係がとらえられる例はない。しかし，後述する後北C_1式との関係も含めると，以下の例がある。

1．表にあげた宇津内Ⅱb式一括土器群と共伴する例がない。
2．岐阜第二遺跡〔藤本・宇田川編1982〕Pit28（第9図）や栄浦第一遺跡〔武田編1995〕pit 106では，微隆起線Ⅱ類と後北C_1式が共伴する。
3．常呂川河口遺跡では，Pit22a（宇津内Ⅱb式）を切ってPit22（後北C_1式）が構築されている。

以上の例からすると，これら微隆起線土器Ⅱ類は，これまでに検討した宇津内Ⅱb式に後続する別型式の土器群と考えてよいだろう。

6．宇津内式土器と後北C_1式土器の間

微隆起線土器Ⅰ類において生じた，擬縄貼付文から微隆起線への変化は，おそらく道央での後北B式土器からC_1式土器への変遷の中で確認できる，微隆起線への変化と連動したものであろう。また，微隆起線土器Ⅱ類においては，帯縄文が施され，微隆起線が複雑さを増すなど，後北C_1式土器との「折衷」ないしは「融合」ともいうべき内容を有している。

このように個々の文様について見てゆくと，宇津内Ⅱb式土器と後北C_1式土器の間はスムーズに連続するように思われる。しかし，宇津内式の終末期の土器をみた場合，他の諸属性のなかでも特に，文様の割り付け原理においては宇津内式の伝統が維持されている。後北C_1式土器と隆起線土器Ⅱ類が共伴している岐阜第二遺跡pit28（第9図）を例に，両型式の文様の割り付け原理について分析し，比較してみよう。

まず後北C_1式（第9図1・3）である。胴部の文様帯に施された文様は，縦・横両方の単位に分割してとらえることができる。横方向の単位の構成についてみると，第9図3で横方向の3段の帯に分割された中央の単位をaとすれば，下の段はaの横方向の線対称の単位a'，上の段はaの横方向の線対称が変形した単位a"としてとらえることができる。一方縦方向の単位は，口唇部突起を基準に土器を縦に8等分した単位の一つをbとすると，bに隣り合う縦の単位は，bの縦方向の線対称の単位b'としてとらえられる。これは突起を中心とした，b+b'という縦の文様単位が4つあるものとしてまとめることも可能である。

このように，胴部文様帯において，横方向には文様単位が多段化(註8)し，縦方向には各単位が線対称な4つの単位で構成される文様構成を持つ土器は，後北C_1式では一般的なものである。

もう一方の，微隆起線土器Ⅱ類（第9図2・4）についてみよう。まず，文様の縦の割り付けであるが，口唇上の突起は2＋2単位で，宇津内Ⅱb式と同じである。また，各突起の下部にみられる同心円＋長方形の微隆起線による意匠も，宇津内Ⅱb式土器と基本的に同じであり，2＋2単位を構成している。しかし，2＋2単位の，各突起下の縦のモチーフをつなぐ斜めの微隆起線は線対称的に構成されており，後北C_1式の縦の割り付け原理の影響が認められる。一方，横の割り付けであるが，地文には横方向の帯縄文が施されて，後北C_1式と同じ多段化された胴部文様帯が意識されている。しかし微隆起線の文様は，横方向の2単位から構成されているとみることも可能ではあるが，上・下の「単位」間で幅・文様意匠の差が大きく，また横方向に多段化もしていない。すなわち，文様の横の割り付け原理についても後北C_1式の影響が認められるが，後北C_1式そのものとは異なっているといえる。

以上のように，この土器の文様の割り付け原理は，後北C_1式の影響を受けつつも，宇津内Ⅱb式の伝統が維持されたものになっている。

本稿で微隆起線Ⅱ類とした土器群は，従来「江別C_1式」〔藤本1982〕，あるいは「後北C_1式に相当する土器群」〔金盛1982〕の一部としてとらえられていた。微隆起線土器Ⅱ類の器形・個々の文様・割り付け原理に認められる後北C_1式の影響をどう評価するかという点が型式設定をする際に問題になってこよう。本稿では，微隆起線土器Ⅱ類には宇津内Ⅱb式の文様の割り付け原理の伝統が維持されている点を重視し，後北C_1式とは別型式ととらえておきたい(註9)。具体的には，

・宇津内ⅡbⅠ式・・・前章までに検討した宇津内Ⅱb式と微隆起線土器Ⅰ類
・宇津内ⅡbⅡ式・・・微隆起線土器Ⅱ類

として細分型式を設定する。すなわち，宇津内Ⅱb式の定義を従来よりも拡大し，網走地域では後北C_1式と宇津内ⅡbⅡ式が共伴するととらえるわけである。

後北C_1式と宇津内Ⅱb式の関係をこのようにとらえる点において，筆者の編年対比は，従来の見解とは異なることになる(註10)。宇津内ⅡbⅡ式の類例としては，栄浦第一遺跡pit106，常呂川河

口遺跡 pit32などの例があり，先述したように栄浦第一の例では，やはり後北 C_1 式と共伴している。

宇津内ⅡbⅡ式土器は，後北 C_1 式が網走地域に分布を拡大し，影響を強める(註11)中にあって，宇津内式の系統上に位置する土器型式の最終末のすがたである，ということができる。

一方，土器製作時における異系統文様の伝習，という面に着目すると，宇津内ⅡbⅡ式と後北 C_1 式では，帯縄文・微隆起線などの製作技法上はほとんど差がないにも関わらず，文様の割り付け原理が異なっている点が注目される。すなわち，後北 C_1 式の製作技術を持つ土器製作者が，宇津内Ⅱb式の文様の割り付け原理に従って土器を製作したことになる。宇津内ⅡbⅡ式の出土例が少ないこともあって多くのことはいえないが，一つの土器製作集団の中で，ごく短期間の間であるが，文様の割り付け原理を異にする2つの土器型式が作り分けられていた可能性(註12)などが考えられよう。このように，宇津内ⅡbⅡ式土器と後北 C_1 式土器の間で認められる土器そのものの関係は，道東と道央の間での人や土器，土器製作技術の具体的な動きを考える上で重要な問題を提起する。

7．宇津内式土器の変遷過程

以上，宇津内式土器の検討を中心に，網走地域における縄文時代晩期末から続縄文時代前半期に至る土器編年を概観してきた。本稿で検討・設定した土器型式を古い順にを並べると，

- **幣舞式**　（栄浦第二13ホ号）
- **（栄浦第二・第一遺跡の土器群）**(註13)
- **「元町2式」**
- **宇津内ⅡaⅠ式**　古段階・新段階
- **宇津内ⅡaⅡ式**　古段階・新段階
- **宇津内ⅡbⅠ式**
- **宇津内ⅡbⅡ式**（後北 C_1 式と併行）

のようになる。

本稿では，文様の割り付け原理と文様単位数の問題を，重要な鍵として編年を行っている。これまでに分析してきた宇津内式土器の，文様の縦の割り付け原理と文様単位数の変遷についてまとめると以下のようになる。

1．縄文晩期後半にみられた4単位，2および2＋2単位の口唇部突起は，縄文晩期末～続縄文初頭から「元町2式土器」にかけて衰退し，宇津内ⅡaⅠ式古段階ではほぼ消滅する。

2．宇津内ⅡaⅠ式古段階では，縦の文様単位は一定の単位数なしの例と4単位の例のみであり，文様の縦の割り付け自体もあまり意識されていないが，ⅡaⅠ式新段階以降，2＋2単位の口唇部突起の発達とともに口縁部・胴部文様にも側面－正面観に基づいた縦の割り付け原理が次第に強く働くようになり，宇津内ⅡaⅡ式古段階では口縁部・胴部に貼付文による2＋

2単位の文様が出現する。

3．宇津内ⅡaⅡ式新段階になると，文様の縦の割り付け原理は全て2＋2単位を基本としたものになる。

4．続く宇津内ⅡbⅠ式になると，口縁部・胴部文様における縦の単位間に新たに縦の割り付けを加えた土器が出現する。次の宇津内ⅡbⅡ式では，全ての土器がこの種の割り付けを有するようになる。

宇津内式土器の変遷過程については，冒頭に述べたように，佐藤達夫氏，宇田川洋氏による考察がある。佐藤氏の編年は，氏が「この時期の細分は，隆起線文の変遷に即して行いうるように思われる」〔佐藤1972：90〕と述べているとおり，貼付文の変遷すなわち発達の過程に主に注目したものである。一方宇田川氏の編年も，型式変遷をとらえる際の視点は基本的には佐藤氏と同じで，貼付文の変遷過程に重点が置かれている。

両氏の指摘によって，宇津内式の変遷過程の概略が明らかになったことは評価されるべきであろう。実際に，両氏の編年と筆者の編年は基本的な視点が異なるので単純に対比はできないが，両氏の指摘した貼付文の変遷過程は，貼付文の施された土器のみに注目した場合，筆者の編年の中でもトレースすることが可能である。

両氏の編年における最大の問題点は，先にも述べたように，一時期に属する一括土器の中の，個々の土器に施された文様どうしが「多相組成」〔林1990〕を示していることに対して，十分な説明がなされていないところにある。宇津内Ⅱa式においては特に，貼付文をもつ土器と持たない土器が一時期のセットを構成する場合が多く，両氏の編年ではこれらのセットの位置づけがやや困難になってしまう。本稿では，個々の土器の文様が「多相組成」となっているようなセットで構成される土器群について，土器間に共通する文様の割り付け原理に注目して，佐藤・宇田川両氏の編年の問題点を克服しようと意図したわけである。

8．続縄文土器の文様の割り付け原理と文様単位数について

文様の割り付け原理と単位数の変化が，宇津内式土器においては系統的・連続的に生じていることを前章までにみた。宇津内式土器が，他の土器型式と土器編年の上で縦と横の関係をもつ以上，宇津内式の分析において重要な視点は，宇津内式と関係のある諸型式の分析に際しても無関係ではあり得ないであろう。最後に，後北式と，道北・道東の続縄文土器群について，文様の割り付け原理および単位数の変化の仕方を概観し，続縄文土器編年のための新たな視点の提示と問題提起を行ってみたい。

8.1 後北式の文様割り付け原理

後北式土器の成立過程と系統をめぐっては，現在において，やや異なる2つの見解が存在する。一つは道央部に分布を拡大させた恵山式土器と，道東・道北の土器群が接触して後北式が成立した

とする見解〔森田1967，木村1982，高橋1984〕であり，もう一方は，前者の見解に比して，後北式に認められる道央部の在地の土器群の伝統をやや強調する意見〔大沼1982b〕である。文様の割り付け原理という観点から後北式の系統と変遷過程を考えると，興味深い問題が浮かび上がってくる。本稿で後北 C_1 式土器の文様の割り付け原理の分析を行った際に用いた，胴部文様を縦・横の単位に分割してとらえる視点から，後北式土器の編年について考えてみたい。

後北式にみられる，胴部文様帯を横方向の単位に分割する手法の系統については，恵山式との関係がまず視野におかれるが，道央部の在地系統の土器群にも，後北A式以前の時期から地文の縄文ないしは帯縄文の横走という形で「後北式の地文の手法」が萌芽的に認められるという指摘もある〔大沼同上：85〕。後北式の系統を考える上で重要な問題の一つであろう。

胴部文様帯の横方向の分割は，後北A式に認められる帯縄文や列点文などによる分割において確立し，続く後北B式では貼付文によって分割が行われ，後北 C_1 式においてもっとも多段化して発達する。その後，後北 C_2・D式において衰退し，分割がみられなくなってゆく。これらの変遷は連続的にとらえられる。

一方，胴部文様の縦方向の分割においては，続縄文初頭では分割がみられないが，後北A式前後から4単位の分割，後北B式前後から C_1 式にかけて8単位や，8分割に基づいた各単位が線対称の4単位の分割が認められるようになる。道東の縦の割り付け原理の影響関係に関していえば，後北式の8分割と，宇津内IIb式にみられる8分割（SF＋4 type）の対応関係が，興味深い問題である。また，この時期の道央の土器群の中には，胴部文様の縦の割り付けとして2＋2単位を有するものが少数ながら認められるようである(註14)。道東の影響として注目すべきであろう。

後北 C_2・D式の時期になると，これらの縦の単位の分割も衰退し，4単位から，次第に縦の単位があいまいになり，ついには縦の単位もなくなり北大式へと続く。このように，後北式においては胴部文様の縦の割り付け原理も，全体として連続的に変化する。

また，道央の土器群においては口唇部突起の数と単位，口唇部突起から縦に垂れ下がる貼付文の問題も重要である。道央での口唇部突起の数は，続縄文初頭では0個（平縁），4個などが認められるのに対し，後北A式以降では，4個が一般的になる。しかし，2個一組の突起を含んだ4単位，2＋2単位も認められるようであり，これらの突起は恵山式や道東の土器群との関係を考える上で重要な存在であると思われる。口唇部突起は，やはり後北 C_2・Dの時期には次第に衰退し，平縁となって北大式へと続く。

後北A式にみられる，口唇部突起から縦に垂れ下がる貼付文に関しては，大沼氏が「道東や道北で発達したものとみられるが，古くさかのぼれば，晩期の船（ママ）形土器などにまで系譜がたどれそうである」と述べている〔大沼1982b：88〕。縄文晩期の「舟形土器」などにみられるこの種の貼付文は，網走地域では「元町2式」では少数みられ，宇津内式ではみられなくなることを述べた。釧路地域でも，いわゆる「興津（おこつ）式」〔澤1982，宇田川1982〕にみられるようであるが，その後はやはり衰退するようである。大沼氏の述べるように，後北A式の時点でみられるこの種の貼付文が，

縄文晩期の「舟形土器」の系統を引くものであれば，縄文晩期における2ないし2＋2単位の突起と，後北A式にみられる貼付文を伴う2＋2単位の突起は系統上「相同」で，宇津内IIa式にみられる2＋2単位の突起は，縄文晩期のそれとは系統上「相似」であることになろうか。

その他にも，口唇部突起に関しては，後北C_1式の壺形土器に多く施されている2単位ないしは4単位の吊耳の問題がある。このように，後北式の文様の割り付け原理に関しては，特に縦の2＋2単位の系統について整理する必要があろう。

8.2 釧路地域の続縄文土器

次に道東の，釧路地域の土器群についてみる。文様の割り付けと単位数の問題に関していえば，いわゆる「興津式」あるいはそれ以降にみられる，横走する胴部の縄文がまず問題になる。この文様は，道央の土器群にみられる，胴部文様帯を分割する割り付けの萌芽的段階とされる部分と影響関係にあるものであろう。しかし釧路地域では，この割り付け法は定着しなかったようである。このような文様は網走地域にも若干みられるが，釧路地域と比較して少数であり，この時期の道央との関係の強さを網走地域と釧路地域でと比較した場合，釧路地域の関係の強さを示すものである。

いわゆる「興津式」以降の釧路地域の土器群に関しては，澤四郎氏〔澤1982〕や宇田川氏〔宇田川1982〕による編年があり，「下田ノ沢式」が設定されている。しかしまとまった資料が少なく，宇津内式との関係〔工藤1994〕も含め，土器型式の実態には不明な点が多い。ただし「下田ノ沢式」は，型式変遷の上では，宇津内式と同じように，側面－正面観を強調した2＋2単位の口唇上の突起や吊耳状突起，口縁部・胴部文様を発達させてゆく変遷過程を経ると思われる。

道東の土器型式群の変遷においては，諸要素について宇津内式・「下田ノ沢式」という地域性を有しながらも，文様の割り付け原理は網走地域・釧路地域で共有され，軌を一つにしながら変化するとみることができる。すなわち，釧路地域のいわゆる「下田ノ沢式」土器については，本稿で明らかにした宇津内式の文様の縦の割り付け原理の変遷過程に照らし合わせて，編年を検討することが可能であると思われる(註15)。

8.3 道北の続縄文土器

次は道北の土器群である。宗谷地域でまとまって出土した続縄文土器としては，声問川大曲遺跡〔土肥・種市1993〕III群B類土器（以下，「声問B類土器」と略）と，鈴谷式土器〔熊木1996〕があげられる。

声問B類土器は器形や，口縁部文様の基本的構成など，宇津内式と共通点が多いが，宇津内式と比較すると，胎土，口唇上の突起の形態，地文，個々の文様などが異なっており，地域差が認められる。文様の縦の単位は，完形土器がわずかしかなく不明な部分が多い。破片から判断すると，口唇上に突起を有するものもあるが，平縁が多いようである。また，口縁部・胴部文様には貼瘤文が若干みられるようだが，破片のため，一定の単位数が存在するか否か確認できない。縄線文のモ

チーフにも縦の割り付けがあるようであるが，単位数については同様に不明である。利尻富士町役場遺跡〔内山編1995〕の例は，同型式の突起を有する土器の例であるが，この例は5単位であり，「追いまわし施文」であるように思われる。よって，声問B類の口唇部突起や，口縁部の文様も，「追いまわし施文」で一定の単位数を持たないものが多い可能性がある(註16)。

このように，声問B類土器の単位数は，一定の単位数を持たない本稿でいうP類が多数を占めるようであり，本稿での宇津内式土器の編年に対比すると宇津内ⅡaⅠ式古段階に併行すると考えられる(註17)。

一方，北海道の鈴谷式土器は，併行する時期の北海道の他の続縄文土器群とは異なり，文様の縦の割り付けにおいて，一定の単位数を持たない。これはサハリンの土器群との関係を第一に考える必要があろうが，一定の文様の縦の割り付け単位を基本的には持たない点で，声問B類土器との関係も考慮する必要があろう。

筆者は以前，北海道の鈴谷式と，声問B類土器の間の系統上の関連と，編年上および型式的ギャップについて考察したことがある〔熊木1996〕。その中で，以下のような仮説を述べた。「『声問B類土器』と『鈴谷式土器』初頭との間に未知の土器型式が介在し，両者の間に関連が認められると仮定するならば，『声問B類土器』から『鈴谷式土器』への変遷はサハリン南部において生じたことになるであろうし，そこには，同じ時期の宗谷地域でみられる土器群（『声問B類土器』以後に位置づけられる，断片的に確認されている続縄文土器の諸型式）はほとんど関係してこないことになるであろう。」〔熊木同上：18〕声問B類土器と，鈴谷式土器との間で，文様の縦の割り付け原理が共通するという点は，筆者のこの仮説を補強するものである。

9．おわりに

以上，宇津内式の編年を，文様の縦の割り付け原理と単位数に主に注目して検討し，また，後北式と，道東・道北の続縄文土器における，文様の割り付け原理について概観した。

土器の編年研究に際しては，文様の割り付け原理を検討するのみでは不十分なことはあらためて言うまでもなく，他の様々な属性についても適切な方法で取り上げ検討しなければならない。その意味で，本稿で提起した問題は，続縄文土器編年研究に際して検討すべき多くの課題の中の一つであるという見方もできよう。

しかしながら，続縄文土器編年研究についていえば，従来の研究では，個々の器形や文様の検討が中心であり，土器型式・土器型式群を系統的・構造的に把握しようをする試みは特に不十分であった。土器編年研究においては，「連続性の認識にしても他型式の影響にしても，文様や器形の近似を個々に指摘するだけでは十分とはいえない。その近似が構造的なものなのか，部分的なものなのか，部分的なものだとしたら構造的にみた場合のどの部分の近似なのかを吟味する必要がある」〔今村1983：124〕のである。個々の土器ならびに一型式内の土器群について器形と文様を結びつける構造を把握し，土器型式間でそれらの構造を比較検討することによって，器形と文様の変遷

や影響関係を正しく理解できるようになる。すなわち，土器型式間に存在する縦の系統関係と横の影響関係を理解する上で，文様の割り付け原理の検討は重要な役割を果たすといえる。その意味で，本稿で採用した視点・方法は，続縄文土器型式間における通時・共時の関係をより明確に，構造的に解明する上で有効なものであり，続縄文土器の編年を点と点の比較ではなく，縦と横の構造体として理解するために必要な手段の一つであると位置づけることができる。

さらに本稿では，文様の割り付け原理の伝統・系統性が，土器製作者間で異系統文様・技術が伝習される際に保持されている点に注目した。網走地域の宇津内ⅡbⅡ式では，後北C_1式の製作技術と宇津内Ⅱb式の文様割り付け原理が一つの土器の中に共存しており，その現象の解釈として，一つの土器製作集団内で異なる系統の土器型式が作り分けられている可能性を指摘しておいた。このような仮説は続縄文文化における社会関係のごく一部分の解明に向けられたものすぎない。しかし，土器そのものの分析から土器型式の系統を解明することによって，人や土器，土器製作技術の具体的な動きに迫ることは可能であろう。そのための実証的な手段の一つとして，文様の割り付け原理の分析が有効であることが本稿によって提示できたと思われる。

筆者の力量不足から，宇津内式以外の土器型式については詳細な検討をするには至らなかったが，道央・道東・道北の続縄文土器群の系統観と，編年研究の際の視点について問題提起を行ったつもりである。1980年代前半に行われた「続縄文時代を総括する企画」〔木村1986：128〕以降，続縄文時代に関する北海道からの積極的発言が少ないのが現状(註18)であるが，検討すべき課題は多い。筆者も宇津内式以外の土器型式に関して，機会を改めて再論したいと考えている。先学諸氏のご教示・ご批判をいただければ幸いである。

謝辞

本稿の作成にあたり，学生時代よりご指導いただいている藤本強先生（現新潟大学），宇田川洋先生からは今回もご教示いただきました。また，大塚達朗氏にも有益な助言をいただきました。深く謝意を申し上げます。

また，以下の方々には資料閲覧等で大変お世話になりました。末筆ながらここに記して感謝の意とさせていただきます。

内山真澄・大橋毅・小林敬・高畠孝宗・武田修・松田功・森下一彦（五十音順・敬称略）。

註

1）「前北式」「後北式北見型」として把握されてきた道東の土器群が，今日提唱されている続縄文土器型式へと整理・編年されてゆく学史的経緯については，大沼忠春氏〔大沼1977,1982b〕，金盛典夫氏〔金盛1982〕，工藤研治氏〔工藤1994〕らが詳細にまとめている。

2）土器の文様における縦の割り付け原理と単位数の問題を取り上げる上で，本稿では鈴木公雄氏〔SUZUKI1970〕，谷井彪氏〔谷井1979〕，今村啓爾氏〔今村1983〕の論考を参考にした。むろん，文様の割り付け原理や単位に関する理解に手落ちがあれば，全て筆者の責任である。

3）後北式の定義・編年については再検討が必要とされるところであろうが，本稿の主題ではないので，今回は便宜的に大沼忠春氏〔大沼1982b〕の定義・編年に従うことにする。

4）大貫氏は，問題の栄浦第一遺跡の土器群について，1群から3群に分類し，1群土器を「縄文時代晩期終末」の「緑ヶ岡式」併行，2群土器を「続縄文時代初頭」に位置づけ，型式差を認めている。大貫氏のように型式を設定できる可能性もあるが，特に2群土器は量が少なく，層位的なまとまりもはっきりしない。そのため本稿では，大貫氏の言う1群土器と2群土器，およびその類例を一括して縄文晩期末～続縄文初頭の土器群として扱う立場をとっておく。

5）中ノ島遺跡例が，縄文晩期末と宇津内式との間の時期に位置づけられることは，金盛氏がすでに指摘しているところである〔金盛1982〕。

6）林謙作氏が「多相組成」と訳した，“Polythetic Set”で構成されている，といいかえることもできる〔林1990〕。

7）第7図6の土器は，吊耳と思われる突起を1個のみしか有しておらず，他に口縁部文様にも縦の割り付けはないが，SPtypeのバリエーションとしておく。

8）この胴部文様における「多段化」については，金盛氏のすでに指摘するところである〔金盛1982〕。

9）このように，文様の割り付け原理に基づいて宇津内式・後北式の型式区分を行う理由は，後述するように，宇津内式・後北式それぞれの胴部文様の割り付け原理が，各々連続的・系統的に変遷していることによる。すなわち，文様の割り付け原理は，宇津内式と後北式の伝統・系統を把握し，両者を区分するための指標として有効になる。よって，本稿では宇津内式・後北式の型式区分の上でも文様の割り付け原理を重要視する立場をとっておきたい。なお，「共存する諸系統の土器を一括して，一型式としてよぶのが適当かどうか」という問題については，佐藤達夫氏による検討があり〔佐藤1974〕，本稿でも参考にしている。

10）筆者は，以前の論文〔熊木1996〕で，金盛氏〔金盛1982〕らの見解に従うかたちで，宇津内Ⅱb式と後北C_1式を前後関係としてとらえる立場をとった〔熊木同上：第3表及び註35〕が，本文で述べたように訂正しておきたい。ちなみに熊木1996で「宇津内Ⅱb式」としたのは本稿でいう宇津内ⅡbⅠ式に相当する。

11）後北式土器の割り付け原理は，宇津内ⅡbⅠ式の時期にすでに道東に波及している（岐阜第三遺跡22号竪穴の例〔東大編1977：Fig. 68-1〕など）。逆に，後述のように，道央の後北C_1以前の土器群にも，道東の影響とみられる2＋2単位の文様が認められる。このように，道東・道央間での文様割り付け原理の影響関係は宇津内ⅡbⅡ式・後北C_1式以前の時期から始まっているようである。註14）参照。

12）網走地域の後北C_1式を搬入品とみるならば，後北C_1式と宇津内ⅡbⅡ式とは土器製作集団が異なる，という反論が可能かもしれない。しかし本文で述べたように宇津内ⅡbⅡ式と後北C_1式とは製作・施文技法上の共通項が多く，宇津内ⅡbⅡ式を製作した集団が後北C_1式を製作する際に技術的な困難があるようには思えない。さらに，近年，常呂川河口遺跡において後北C_1式がややまとまって，宇津内ⅡbⅡ式よりも多く出土した状況を考慮するならば，網走地域の後北C_1式の全てが搬入品であるという見方は不自然になるであろう。

13）栄浦第一遺跡1群・2群土器を土器型式として設定する際の問題点は，本文に触れたとおりである。本稿では型式設定に関する判断を保留としているため，栄浦第一遺跡1群・2群土器を当該時期の代表的な土器群として括弧付きで提示する。

14）江別坊主山遺跡出土の2例〔高橋編1975：Pl. 1-4，小林編1989：単色図版1152〕が該当すると思われる。ただしこれらの例では，宇津内式の貼付文の意匠・割り付け原理はそのまま転写されているわけではなく，後北式の意匠・割り付け原理の影響下にある。なお，宇津内式の貼付文が直接的に転写された例としては，後北式の例ではないが，室蘭大黒島遺跡の例〔大場1962，菊池1978〕がある。これは，恵山式土器に，宇津内式に由来する2単位の吊耳と貼付文が転写されたものである。この例の吊耳・貼

付文については，従来，後北式の影響とされてきた〔菊池同上，石本1984〕が，特に貼付文に関しては，意匠・割り付け原理とも，まさに宇津内式そのものに由来するものであることを強調しておきたい。

15) 宇津内式の型式変遷と「下田ノ沢式」のそれとの間で，「類似する部分」があることはすでに宇田川氏が指摘している〔宇田川1982：125-126〕。宇田川氏の編年では，突瘤文の有無，貼付文・縄線文の意匠の発達過程など，個々の文様の消長が両型式の間で連動すると指摘されているが，筆者は，文様の割り付け原理そのものが，両型式の変遷において連動していることを指摘しておきたい。

16) 第3表でP類に分類した常呂川河口遺跡21号竪穴床面の例〔武田編1996：第122図1〕は，口縁部に縦の縄線文のモチーフを有し，縄線文の原体にLRの縄，地文にR撚糸文を用い，口唇部にはRの縄による刻みを入れるなど，声問B類土器との共通点が多い。この土器の縦の単位も，平縁で，5単位の縄線文による縦の分割がなされる「追いまわし施文」の例であり，声問B類土器の単位が，「追いまわし施文」を含むP類を基本としていることを類推させる例となっている。

17) 筆者は以前の論文〔熊木1996〕で，声問B類土器の編年について「宇津内Ⅱa式前半期の土器群と併行関係にある」と述べたが，本文のように訂正する。なお，声問B類土器の一部には，縄線文のモチーフや，口唇上突起の形態から判断すると，「元町2式」の時期に比定されるものも含まれるようである。

18) このような現状のなかで，近年，加藤邦雄氏の提起した続縄文文化の枠組みを見直そうとする試み〔加藤1992〕は特に注目に値する。

19) 第1表で分析の対象としたのは，佐藤1972：Tab. 4記載の土器群に，同書のFig. 279-1の土器を加えたものである。

20) 以下の資料は，遺構に伴う一括土器としてとらえるには疑問があるか，遺構に伴うか否か不明であったため，第3表・第5表では分析対象には含めていない。天塩川川口遺跡〔森田1967〕3号竪穴，オムサロ遺跡〔因幡1977〕78号住居址，住吉遺跡〔大場・奥田1960〕C竪穴，尾河台地遺跡1号竪穴，谷田遺跡〔金盛・松田1988〕の全例。

21) 展開図は以下の文献の写真からトレースした。金盛ほか1983：PL192・193（第6図3・4，第8図8）小林編1989：単色図版1156（第9図4）。第9図3は筆者の実測。なお，展開図の縮尺は不同である。

参 考 文 献

荒生健志　1988　『美幌町文化財調査報告Ⅳ　元町3遺跡』美幌町教育委員会

荒生健志　1994　『美幌町文化財調査報告Ⅻ　元町3遺跡』美幌町教育委員会

荒生健志・小林敬　1986　『美幌町文化財調査報告Ⅱ　元町2遺跡』美幌町教育委員会

荒生健志・小林敬　1988　『美幌町文化財調査報告Ⅲ　元町3遺跡』美幌町教育委員会

石本省三　1984　「北海道南部の続縄文文化」野村崇編『北海道の研究第1巻　考古編Ⅰ』清文堂　pp. 319-354

因幡勝雄　1977　「北海道紋別市オムサロ遺跡の住居址と遺物について」古代文化第29巻第1号　pp. 42-48

今村啓爾　1983　「文様の割り付けと文様帯」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究5　縄文土器Ⅲ』雄山閣　pp. 124-150

宇田川洋　1977　『北海道の考古学　2』北海道出版企画センター

宇田川洋　1982　「道東の続縄文土器」加藤晋平・澤四郎編『縄文土器大成5　続縄文』講談社　pp. 124-126

宇田川洋　1985　「第四章　第四節　栄浦第一遺跡出土の宇津内式土器群に関する若干の考察」東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編『栄浦第一遺跡』東京大学文学部　pp. 306-310

内山真澄編　1995　『遺跡発掘調査報告書　利尻富士町役場』利尻富士町教育委員会

大貫浩子　1995　「付編Ⅷ　縄文時代晩期末から続縄文時代初頭の土器について」武田修編『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会　pp. 528-534

大沼忠春　1977　「北海道考古学講座6　六，続縄文期」北海道史研究第12号　pp. 68-80

大沼忠春　1982a　「続縄文土器型式の編年」加藤晋平・澤四郎編『縄文土器大成5　続縄文』講談社（p. 117図6）

大沼忠春　1982b　「道央地方の土器」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究6　続縄文・南島文化』雄山閣　pp. 75-93

大沼忠春　1989　「続縄文式土器様式」小林達雄編『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』小学館　pp. 357-360

大場利夫　1962　『室蘭遺跡』室蘭市

大場利夫・奥田寛　1960　『女満別遺跡』女満別町教育委員会

加藤邦雄　1992　「北海道編4　伝統文化と新来の文物」須藤隆ほか編『新版〔古代の日本〕9　東北・北海道』角川書店　pp. 427-448

金盛典夫　1973　「Ⅲ　宇津内A地点」米村哲英・金盛典夫『宇津内遺跡』斜里町教育委員会　pp. 12-33

金盛典夫　1982　「北見地方の土器」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究6　続縄文・南島文化』雄山閣　pp. 103-114

金盛典夫　1996　「宇津内式土器」大川清ほか編『日本土器事典』雄山閣　p. 583

金盛典夫・松田功　1988　『斜里町文化財調査報告Ⅲ　谷田遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会

金盛典夫ほか　1983　『斜里町文化財調査報告Ⅱ　尾河台地遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会

菊池徹夫　1978　「恵山式と江別式」北奥古代文化第10号　pp. 61-70

木村英明　1982　「『後北式』土器の成立について」考古学研究第28巻第4号　pp. 12-25

木村英明　1986　「Ⅱ地域別文献解題　1北海道　5続縄文時代」近藤義郎ほか編『岩波講座日本考古学別巻1　日本考古学研究の現状』岩波書店　pp. 128-131

工藤研治　1994　「続縄文時代」北海道考古学第30号　pp. 29-36

久保勝範　1978　『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』北見市教育委員会

熊木俊朗　1996　「北海道北部の『鈴谷式土器』について」古代文化第48巻第5号　pp. 12-20

河野広道　1933　「北海道式薄手縄紋土器群」犀川会編『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会　pp. 16-18

河野広道　1958　「先史時代篇」網走市史編纂委員会編『網走市史　上巻』網走市役所　pp. 11-270

小林達雄編　1989　『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』小学館

佐藤達夫　1964　「附・モヨロ貝塚の縄文，続縄文及び擦文土器について」駒井和愛編『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡　下巻』東京大学文学部　pp. 89-96

佐藤達夫　1972　「第五章　第十節　13号竪穴及び付近の遺構　遺物」東京大学文学部考古学研究室編『常呂』東京大学文学部　pp. 375-391

佐藤達夫　1974　「縄紋式土器　二　土器型式の実態－五領ヶ台式と勝坂式の間－」日本歴史学会編『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館　pp. 81-102

澤四郎　1969　「Ⅲ　釧路川流域の先史時代　先土器～縄文」釧路川共同調査団『釧路川』釧路市　pp. 216-271

澤四郎　1982　「釧路地方の土器」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究6　続縄文・南島文化』雄山閣　pp. 94-102

鈴木公雄　1968　「安行式土器における文様単位と割り付け」『日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨』日本考古学協会　pp. 5-6

SUZUKI, Kimio　1970　"Design System in Later Jomon Pottery"　*Journal of the Anthropological Soci-*

ety of Nippon（人類学雑誌）Vol. 78 No. 1　pp. 38-49
鷹野光行　1981　「北海道東部の土器」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究 4　縄文土器Ⅱ』雄山閣　pp. 207-215
鷹野光行　1983　「舟形土器について」お茶の水女子大学人文科学紀要第36巻　pp. 47-69
高橋正勝　1984　「北海道中央部の続縄文時代　－江別の恵山式土器群と江別太式・坊主山式土器群－」野村崇編『北海道の研究第 1 巻　考古編Ⅰ』清文堂　pp. 354-384
高橋正勝編　1975　『後北式土器実測図集』北海道先史学協会
武田修　1995　『TK73遺跡　常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査概報(7)』常呂町教育委員会
武田修編　1988　『TK67遺跡』常呂町教育委員会
武田修編　1995　『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
武田修編　1996　『常呂川河口遺跡(1)』常呂町教育委員会
田沢巌ほか　1959　『知床半島チプスケ遺跡』斜里町教育委員会
谷井彪　1979　「縄文土器の単位とその意味（上）（下）」古代文化第31巻第 2 号・ 3 号　pp. 39-51・30-49
土肥研晶・種市幸生　1993　『声問川大曲遺跡』稚内市教育委員会
東京大学文学部考古学研究室編　1972　『常呂』東京大学文学部
東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編　1977　『岐阜第三遺跡』東京大学文学部
東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編　1985　『栄浦第一遺跡』東京大学文学部
馬場修ほか　1936　「座談会　北海道・千島・樺太の古代文化を検討する（二）」ミネルヴァ第 1 巻第 7 号　pp. 31-36
林謙作　1981　「晩期の土器　北海道」鈴木公雄・林謙作編『縄文土器大成 4　晩期』講談社　pp. 137-139
林謙作　1990　「縄紋時代史　6．縄文土器の型式　(1)」季刊考古学第32号　pp. 85-92
藤本強　1982　「第四節　東斜面のピット群」藤本強・宇田川洋編『岐阜第二遺跡　－1981年度－』常呂町　pp. 14-22
藤本強・宇田川洋編　1982　『岐阜第二遺跡　－1981年度－』常呂町
松下亘ほか　1964　『知床岬　－知床半島の古代文化を探る－』市立網走郷土博物館
松田功　1993　『斜里町文化財調査報告Ⅵ　オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
森田知忠　1967　「北海道の続縄文文化」古代文化第19巻第 2 号　pp. 39-50
森田知忠　1996　「続縄文土器」大川清ほか編『日本土器事典』雄山閣　pp. 576-577
山内清男　1967　「日本遠古之文化　補註付・新版」『先史考古学論文集　第一冊』先史考古学会　pp. 1-44（原著　1939）
米村哲英・金盛典夫　1973　『宇津内遺跡』斜里町教育委員会
米村哲英ほか　1972　『ピラガ丘遺跡　－第Ⅱ地点発掘調査概報－』斜里町教育委員会